

市浦村埋蔵文化財調査報告書 第16集

市浦村内遺跡発掘調査事業報告書 I

唐川(3)遺跡 二ツ沼遺跡



唐川(3)遺跡：SI01竪穴住居跡

2004年2月

青森県市浦村教育委員会

序 文

このたび市浦村内遺跡発掘調査事業に際しまして、平成14年度に唐川(3)遺跡の発掘調査、平成15年度に二ツ沼遺跡の試掘調査を実施しました。

今回の発掘調査の成果としましては、唐川(3)遺跡で平安時代後期(10世紀後半代)の竪穴住居4軒が検出されました。市浦村では中世港湾都市・十三湊遺跡の調査が鋭意進められておりますが、今回のように古代の遺跡が調査された例は稀となっています。カマドを伴った竪穴住居跡からは、日常生活で使用された食器として、多くの土師器や須恵器の破片が出土しました。

また一方、二ツ沼遺跡では、これまで中世遺跡として周知されていましたが、試掘調査によって平安時代まで遡ることが明らかになりました。

このように古代における集落の様相が明らかとなるとともに、十三湖周辺地域には、十三湊遺跡に代表されるような多数の中世遺跡だけでなく、それに匹敵する数多くの古代集落が展開していたことが明らかになってきました。

これらの調査を進めるために、ご協力を頂きました青山雅晴氏をはじめ、土地所有者の皆様、文化庁記念物課・青森県教育庁文化財保護課をはじめとした関係機関の方々に深く感謝いたします。

平成16年2月

青森県市浦村教育委員会

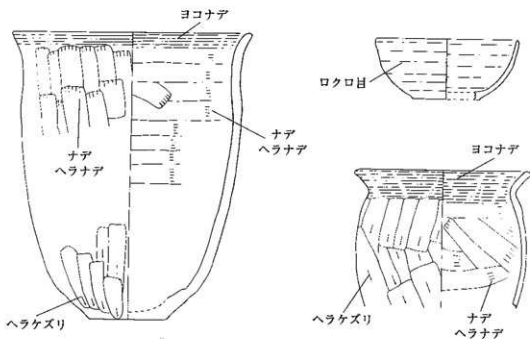
教育長職務代行者

教育次長 浜田和幸

例 言

1. 本書は平成14年度に実施した唐川(3)遺跡の発掘調査及び平成15年度に実施した二ツ沼遺跡の試掘調査成果を取めた報告書である。
2. 調査は文化庁記念物課、青森県教育庁文化財保護課、市浦村遺跡整備検討委員会の指導・助言を得て、市浦村教育委員会が実施した。
3. 本文の執筆・写真撮影は榊原滋高(市浦村教育委員会学芸員)が行った。また、遺物の復原・実測・図面の整理・製図は、長利豪美(調査補助員)を中心に、佐藤美矢子・山田瑞穂・伊藤美枝子・今由里子・葛西節子・成田ヨシエ(作業員)で行った。
4. 土層の色調観察には、「新版・標準上色帳」(農林水産技術会議事務局1995年)を用い、目測で比定した。
5. 発掘調査に際して、次ぎの方々に御指導を賜った。
佐藤 仁・鍋田 元・斎藤 淳・三和平作
6. 出土遺物・調査記録類は市浦村教育委員会が保管・管理している。
7. なお、調査の実施にあたり、青山雅晴氏を初めとして、土地所有者に多大なご理解とご協力を頂戴しました。ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げ、深く感謝致します。

凡 例



目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
第 I 章	調査に至る経緯と経過1
第 II 章	唐川(3)遺跡の調査4
	1. 遺跡の位置と周辺遺跡4
	2. 調査方法と経過4
	3. 基本層序7
	4. 検出遺構と遺物7
	5. 遺構外出土遺物30
	6. ま と め32
第 III 章	二ツ沼遺跡の調査33
	1. 遺跡の位置と周辺遺跡33
	2. 調査方法と経過33
	3. 調査の成果33
	4. ま と め45

挿 図 目 次

第 1 図	市浦村・十三湖周辺の古代～中世遺跡位置図3
第 2 図	唐川(3)遺跡 遺構配置図5～6
第 3 図	SI01 竪穴住居跡(1)8
第 4 図	SI01 竪穴住居跡(2) カマド周辺の遺物出土状況9
第 5 図	SI01 竪穴住居跡(3) カマド周辺の遺物出土状況10
第 6 図	SI01 竪穴住居跡 出土遺物(1)11
第 7 図	SI01 竪穴住居跡 出土遺物(2)12
第 8 図	SI01 竪穴住居跡 出土遺物(3)13
第 9 図	SI01 竪穴住居跡 出土遺物(4)14
第 10 図	SI02 竪穴住居跡(1)16
第 11 図	SI03 竪穴住居跡(2)17
第 12 図	SI03 竪穴住居跡 出土遺物18
第 13 図	SI03 竪穴住居跡(1)20
第 14 図	SI03 竪穴住居跡(2) 床面検出遺構及び焼土層の遺物出土状況21
第 15 図	SI03 竪穴住居跡 出土遺物(1)22

第16図	SI03竪穴住居跡	出土遺物(2)	23	
第17図	SI03竪穴住居跡	出土遺物(3)	24	
第18図	SI04竪穴住居跡	SX02焼成遺構(1)	26	
第19図	SI04竪穴住居跡	SX02焼成遺構(2)	27	
第20図	SI04竪穴住居跡	SX02焼成遺構	出土遺物	28
第21図	SX01焼成遺構		29	
第22図	SX01焼成遺構	出土遺物	30	
第23図	SD02・03溝状遺構		31	
第24図	ニツ沼遺跡	調査位置図	34	
第25図	2トレンチSD01溝状遺構		36	
第26図	4トレンチSI01竪穴状遺構		37	
第27図	ニツ沼遺跡	出土遺物	44	

写真図版目次

図版1	唐川(3)遺跡	遺構写真(一)	46
図版2	唐川(3)遺跡	遺構写真(二)	47
図版3	唐川(3)遺跡	遺構写真(三)	48
図版4	唐川(3)遺跡	遺構写真(四)	49
図版5	唐川(3)遺跡	遺構写真(五)	50
図版6	唐川(3)遺跡	遺構写真(六)	51
図版7	唐川(3)遺跡	出土遺物写真(一)	52
図版8	唐川(3)遺跡	出土遺物写真(二)	53
図版9	唐川(3)遺跡	出土遺物写真(三)	54
図版10	唐川(3)遺跡	出土遺物写真(四)	55
図版11	唐川(3)遺跡	出土遺物写真(五)	56
図版12	唐川(3)遺跡	出土遺物写真(六)	57
図版13	唐川(3)遺跡	出土遺物写真(七)	58
図版14	ニツ沼遺跡	遺構写真(一)	59
図版15	ニツ沼遺跡	遺構・遺物写真(二)	60

第I章 調査に至る経緯と経過

周知の遺跡内における開発行為に対応した村内遺跡発掘調査事業として、平成14年度に唐川(3)遺跡の発掘調査、平成15年度に二ツ沼遺跡の試掘調査を実施した。

唐川(3)遺跡は、十三湖北岸の丘陵台地縁辺上に位置する平安時代の遺跡として周知されている。遺跡は唐川城跡の西側に位置しており、牧場地(唐川牧場)として利用された緩やかな台地上にある。遺跡台帳によると、昭和36年の分布調査で、唐川牧場を中心に大きく3地点に遺跡が分布していることが確認され(当時A・B・C地点と呼称していた。)、多くの竪穴住居跡の窪みや土師器や須恵器などの遺物が認められたようである。今回の調査地点は、C地点に相当しており、現在は唐川(3)遺跡として遺跡台帳に登録されている。今回の調査に至る経緯は、平成14年5月28日に青森県文化財保護指導員・三和平作氏による文化財パトロール中、当該地域において、一部掘削による畑地造成が行われているのが発見されたことによる。周辺には土師器・須恵器などの遺物散布が認められたため、早急に文化財保護の対応が必要であるとの報告が市浦村教育委員会に届けられた。そこで、市浦村教育委員会では青森県文化財保護課の指導のもと、開発者との協議を重ねた結果、発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなった。なお、開発者には顔末書の提出とともに、改めて文化財保護法第57条の2第1項の規定による届出書を提出していただいた。今回の事態は、埋蔵文化財包蔵地の周知が徹底されていない状況など、当方にも責任の一端を痛感しており、今後、このような事態を繰り返さないよう努力していきたい。

平成14年度 調査要項

- | | |
|-------------|--|
| 1. 事業名 | 村内遺跡発掘調査事業 |
| 2. 事業内容 | 農事目的の造成に伴う発掘調査 |
| 3. 遺跡名及び所在地 | 唐川(3)遺跡
青森県北津軽郡市浦村大字磯松字磯野272-126・157 |
| 4. 調査期間 | 平成14年8月5日～平成14年8月29日 |
| 5. 調査面積 | 7,200㎡ |
| 6. 調査組織 | 市浦村教育委員会
教育長 木村 義光
教育次長 古川 徹
主任主査 近藤 昌浩
(調査担当者) 学芸員 榑原 滋 高(安藤の里振興室)
調査補助員 長利 豪美
発掘作業員 佐藤 美矢子、山田 瑞穂、伊藤 美枝子、
葛西 節子、成田 ヨシエ、今由 黒子、
秋田谷 やゑ子、古川 トシ |

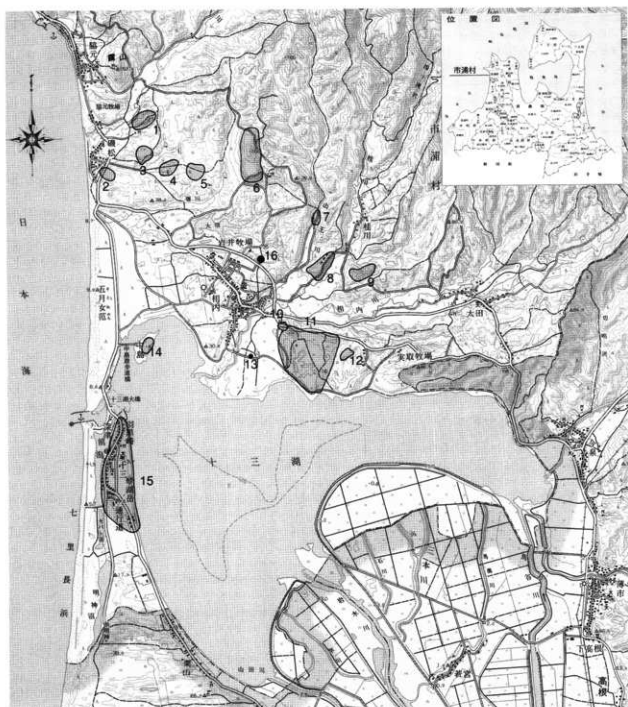
一方、二ツ沼遺跡は十三湖北岸に位置しており、唐川城跡の南側台地上に立地する中世遺跡である。昭和28・29年には、すでに早稲田大学の桜井清彦教授によって発掘調査が行われている。当時、地表面観察では19箇所ほどの竪穴住居の窪地が確認され、そのうちの9箇所が発掘調査されている。二ツ沼遺跡は竪穴遺構から青磁碗片のほか、天聖元寶（北宋）や永楽通寶（明）といった銭貨や刀子片が出土しており、報告の副題に「青磁を伴う竪穴調査報告」として紹介されている〔桜井1955〕。現在では、中世の竪穴遺構の検出例は東日本の中世遺跡において普遍的に認められるが、中世に竪穴遺構が存在するといった認識がなかった当時の研究状況を考慮すると、貴重な報告例と言えるだろう。

今回の調査に至る経緯は、平成15年4月17日付けで市浦村産業建設課より、市浦村一般廃棄物最終処分場建設を目的とした埋蔵文化財所在の有無及びその取り扱いについての照会があり、文化財保護法第57条の2第1項の規定による届出書の提出を受けたことによる。調査前の遺跡の現況は、すでに一帯が牧場地として造成されており、竪穴遺構等の窪みは全く確認できなかった。よって、遺跡は削平などの被害を受けている可能性が高く、遺跡の実態が全く不明となってしまっていることから、開発工事に先立って、遺跡の実態把握をする必要性があった。そこで、青森県文化財保護課の指導のもと、村内遺跡発掘調査事業費を用いて、試掘調査を行うこととなった。

平成15年度 調査要項

- | | |
|-------------|----------------------------------|
| 1. 事業名 | 村内遺跡発掘調査事業 |
| 2. 事業内容 | 市浦村一般廃棄物最終処分場建設に伴う試掘調査 |
| 3. 遺跡名及び所在地 | 二ツ沼遺跡
青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81-401 |
| 4. 調査期間 | 平成15年6月2日～平成15年6月6日 |
| 5. 調査面積 | 110㎡ |
| 6. 調査組織 | 市浦村教育委員会 |

	教育長	木村 義 光
	教育次長	浜田 和 幸
	主任主査	近藤 昌 浩
(調査担当者)	学芸員	榊原 滋 高 (安藤の里振興室)
	調査補助員	長利 豪 美
	発掘作業員	佐藤 美矢子, 伊藤 美枝子, 葛西 節子, 成田 ヨシエ, 今由 里子, 三和平 作



第1図 市浦村・十三湖周辺の古代～中世遺跡位置図

1:50,000 (1cm=200m)
 0 1000 2000 3000m

第1表 市浦村・十三湖周辺の古代～中世遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	古館遺跡	平安・中世	館跡	9	ナガレ山遺跡	平安	館跡or集落
2	磯松砂山遺跡	平安・中世・近世	散布地	10	オセドウ貝塚	縄文・古代・中世	貝塚・館跡or集落
3	唐川(3)遺跡	平安・縄文	集落	11	福島城跡	平安・中世	館跡or集落
4	唐川(1)遺跡	平安	集落	12	実取(1)遺跡	平安	散布地
5	唐川(2)遺跡	平安	集落	13	実取(2)遺跡	平安	集落
6	唐川城跡	平安・中世	館跡	14	中島遺跡	奈良	散布地
7	山王坊遺跡	中世	宗教遺跡	15	十三湊遺跡	中世・近世	港湾遺跡
8	赤坂遺跡	平安	集落	16	二ツ沼遺跡	平安・中世	集落

第Ⅱ章 唐川(3)遺跡の調査

1. 遺跡の位置と周辺遺跡

十三湖北岸地域には、矢形石山(587m)・増川岳(714m)・四ツ滝山(670m)・木無岳(587m)・浜名岳(603m)など峰々が連なり、中山山地を形成している。唐川(3)遺跡は、その四ツ滝山・木無岳から西側に派生した標高20~30mほどの台地上に立地しており、北側には磯松川、南側には唐川といった河川に挟まれた立地環境にある。西側の眼下には、磯松集落や日本海を一望できるだけでなく、北側には古代の環濠集落として知られる古館(墳館)遺跡が所在している。また、神名備山として知られる標高152mの霧山を望むことができる。さらに東側の同じ台地上には、古代集落の唐川(1)・(2)遺跡のほか、標高160mほどの独立丘陵上には、近年の発掘調査で明らかとなった古代環濠集落として知られる唐川城跡など、古代の集落や城館が多数確認されている。

2. 調査方法と経過

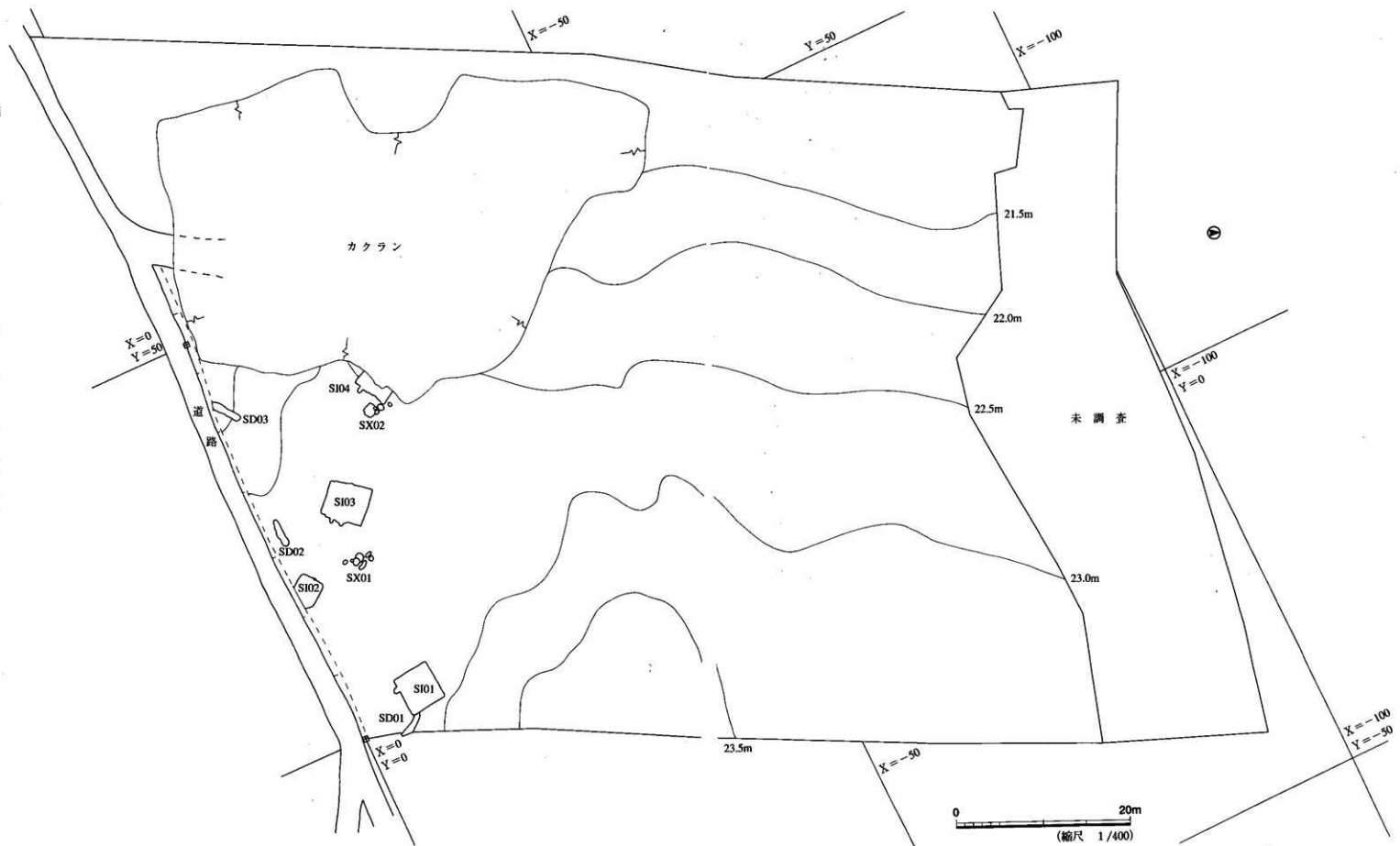
調査前には調査区南西部に、すでに掘地造成のため重機によって一部地山面が削平されており、遺跡破壊を受けている箇所があったほか、調査区の約半分ほどが、表土の黒色腐食土を剥いだ状態で地山面が露出していた。

そこで、本地点の調査は以下の方法で行った。まず、重機によって、工事予定地の残り全域の表土をすべて剥ぎ取った。ただし、重機による表土剥ぎに際しては、開発者である青山雅晴氏のご協力をいただいて作業を進めることができた。次に調査区全域に渡って、作業員によるジョレンでの精査を行った。

調査区の設定は、調査区の南東隅に原点(0, 0)の杭を任意に設定した。さらに調査区南端の東西道路に沿って、原点から50m離れた地点に方向杭(0, 50)を設定し、それぞれ基準杭とした。ただし、調査区全体に渡って、調査杭を設定することはしなかった。なお、遺構の実測に際しては、それぞれの遺構にさらに2点の基準点(遺構基準点)を設定して水系を張り、直角に遺構の測点を計測して、図化を行った。遺構基準点は、後日、トータルステーションにて座標を計測し、全体図の中に遺構実測図を貼り合わせることにした。なお、調査区のレベル(標高)は市浦村役場前の国土座標基準点から、トータルステーションにてレベル移動を行ったが、国土座標は取えずに計測しなかった。

遺構は調査区の南端部でまともな検出されたほかは、全く存在しなかった。検出された堅穴住居の図化は、20分の1の縮尺図のほか、床面出土の遺物やカマド周辺出土の遺物は、適宜10分の1の縮尺図を作成して出土状況を詳細に記録した。なお、調査区全体の測量図は、トータルステーションにて、任意の点を凡そ2m間隔で地点とレベルを計測し、後日、200分の1の縮尺で等高線を記入した測量図を完成させた。写真撮影は35mmカラーリバーサルや35mmモノクロームのフィルムのほか、必要に応じてプロローニーのカラーリバーサルフィルムも併用した。

8月5日から始まった調査であったが、8月7日から12日までは大雨に祟られ、作業が進まなか



第2図 唐川(3)遺跡 遺構配置図

った。また、8月13日から18日までは盆休みを挟んだため、実質の調査は8月19日からとなった。しかし、検出された遺構の数が少なかったことが幸いして、作業も順調に進み、8月29日には作業をほぼ終了することができた。

3. 基本層序

すでに調査区全域にわたって削平を受けているものと見られ、第1層の黒色腐植土層が10～30cmほどの堆積を見せていたが、その直下がすでに地山面のローム層となっていた。

4. 検出遺構と遺物

発掘調査で検出した遺構は、平安時代に相当する竪穴住居4軒、溝状遺構1基、焼成遺構2基、縄文時代と思われる溝状遺構2基がある。ここでは平安時代、縄文時代の遺構順に記述する。

a 平安時代の遺構

SI01竪穴住居跡（第3～9図）

SI01は調査前の重機による削平のため、竪穴住居の覆土中央部の大半が抉り取られていた。そのため、観察用の畦を残すことなく完掘を行った。

〔位置〕調査区の南西隅、グリットX-6～-10、Y0～5に位置する。

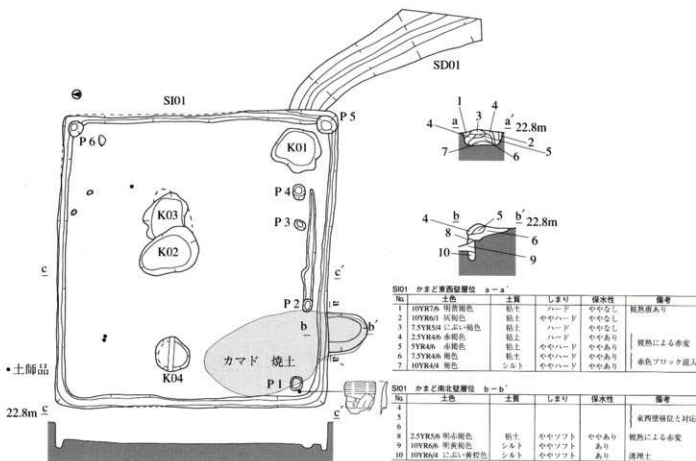
〔重複〕SI01はSD01と切り合う。SI01はSD01よりも新しい。なお、SD01の底面はSI01の底面よりも低いことから、SD01はSI01の排水溝としての役割も考えられる。

〔平面形・規模〕東壁4 m45cm、西壁4 m35cm、南壁4 m70cm、北壁4 m60cmを測り、南北にやや長いものの、ほぼ方形を呈する。床面積は約20㎡である。

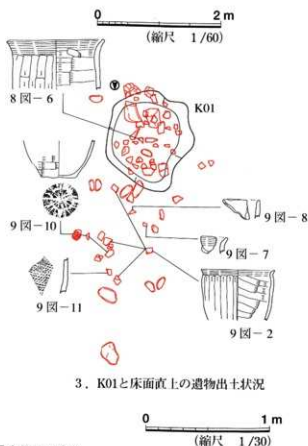
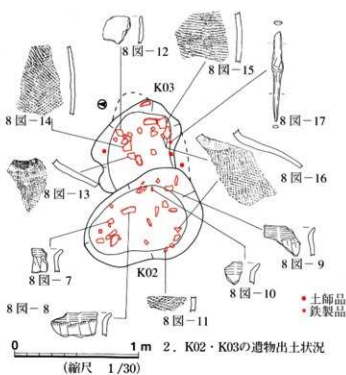
〔壁・床面〕壁の高さは、東壁22～38cm、西壁33～38cm、南壁34～36cm、北壁20～42cmを測り、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。

〔周溝〕周溝は壁に沿って巡り、幅12～20cm、床面からの深さ7～19cmを測る。なお、南東隅と北東隅の周溝中には、径20～30cmの主柱穴と推されるピット（P5・P6）が検出されている。また、南壁に沿って住居内に幅10～15cm、長さ1 m95cmの東西溝が認められる。これは古い時期の竪穴住居の周溝の一部と思われる。つまり、SI01は古い段階の住居が、のちに南側に拡張されたものと推測できる。

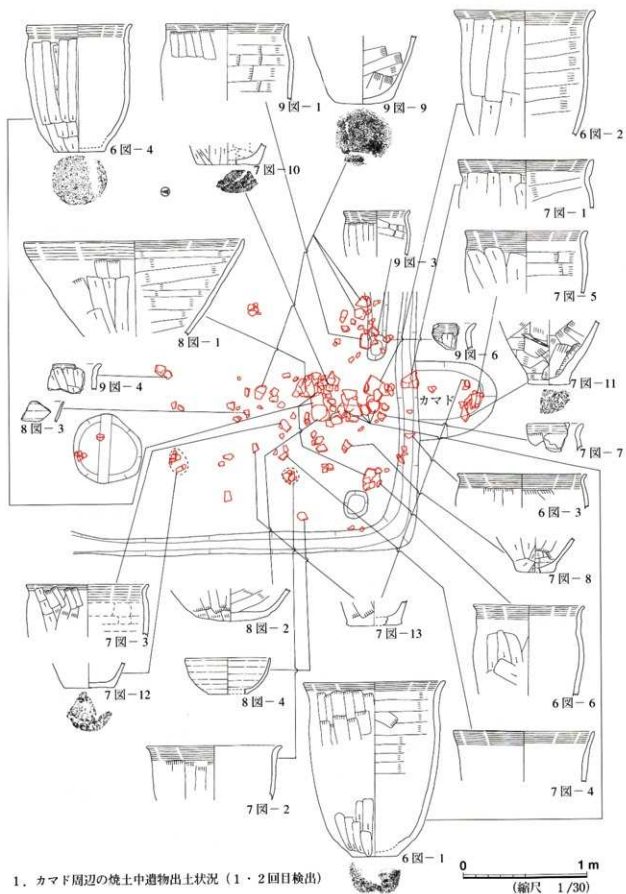
〔床面の遺構と遺物〕床面から土坑4基（K01～K04）、ピット6ヶを確認することができた。K01は南北80cm、東西70cmのやや歪んだ円形で、深さは13cmほどで浅い皿形の断面形を呈する。K01の覆土には焼土が充填され、土師器甕片22点のほか、鉾津2点、軽石10点、粘土ブロック1点のほか、人頭大ほどの円礫5点が出土している。K02とK03は新旧関係を持ち、K02がK03よりも新しい。K02は、重機による掘削の影響によって、覆土表層に黒色腐植土が混入していたが、底面に近いところから多数の遺物が出土している。K02からは土師器甕片22点、須恵器甕片3点、メノウ石1点が出土している。K03からは土師器甕片12点、須恵器壺片1点・甕片5点、鉄製品の刀子1点が出土している。K04は径55cmのやや歪んだ円形で、深さ5cmほどで



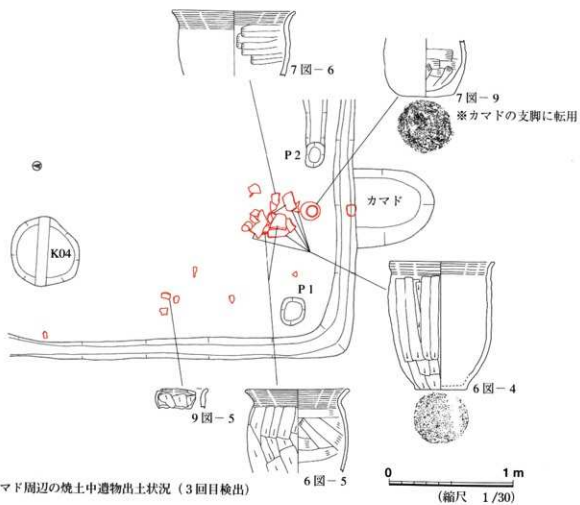
1. SI01平面図及び断面図



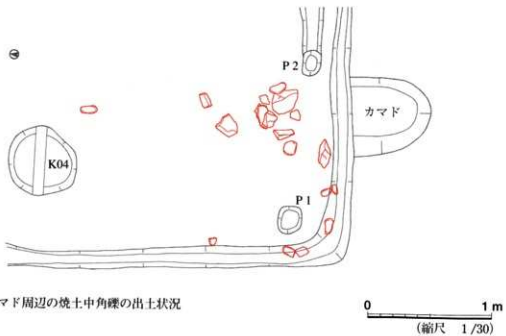
第3図 SI01竪穴住居跡(1)



第4図 SI01竪穴住居跡(2) カマド周辺の遺物出土状況

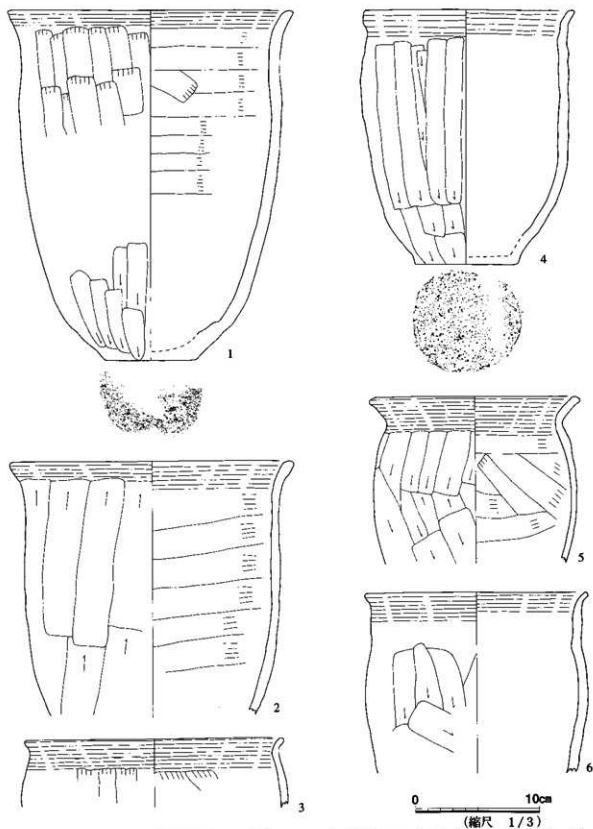


2. カマド周辺の焼土中遺物出土状況 (3回目検出)



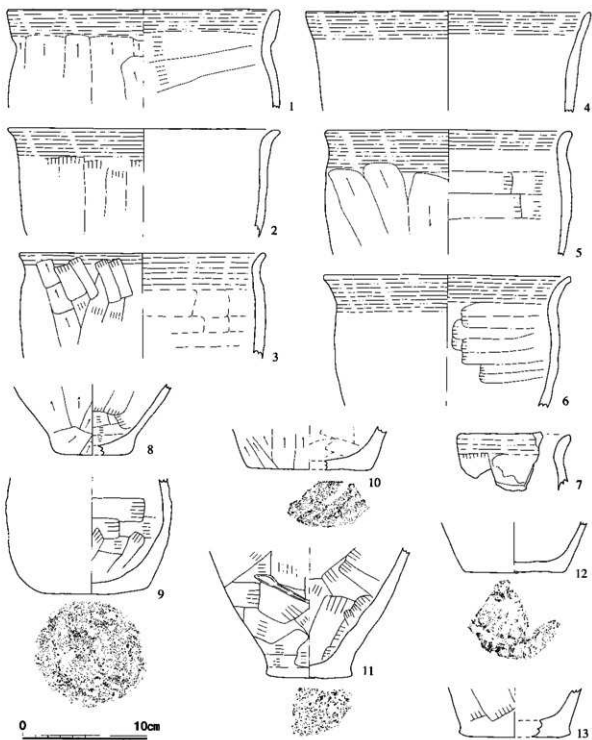
3. カマド周辺の焼土中角礫の出土状況

第5図 SI01竪穴住居跡(3) カマド周辺の遺物出土状況



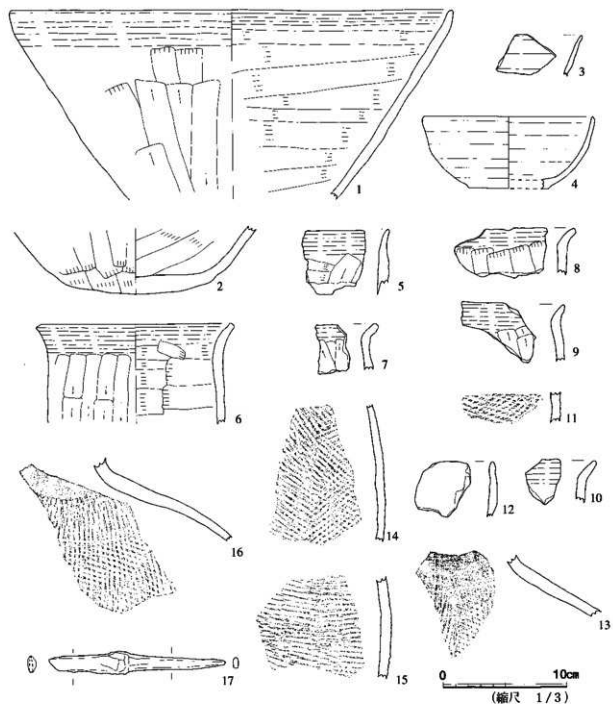
番号	種類	器種	出土層位	計測値 (cm)			外面調査			内面調査			底面調査	備 考	整理番号	写真図版	
1	土師器	甕	B77(礎土)	口径	器高	器径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半	底面調査				
1	土師器	甕	B77(礎土)	23.0	27.9	7.4	ヨコナテ	ナナハシリ	ヘラナズリ	ヨコナテ	ナナハシリ	ヨコナテ	磨滅	砂底		11214中	13面
2	土師器	甕	B77(礎土)	23.0	—	—	ヨコナテ	ヘラナズリ	—	ヨコナテ	ナナハシリ	—	—		420	7層下	
3	土師器	甕	B77(礎土)	21.0	—	—	ヨコナテ	ナナハシリ	—	ヨコナテ	ナナハシリ	—	—	内側面一人土釘着・外側縁部着	416	8層上	
4	土師器	甕	B77(礎土)	17.0	30.4	8.4	ヨコナテ	ヘラナズリ	ヘラナズリ	ヨコナテ	—	磨滅	磨滅	砂底	紐上一枚跡多数混入	4394中	13面
5	土師器	甕	B77(礎土)	17.0	—	—	ヨコナテ	ヘラナズリ	—	ヨコナテ	ナナハシリ	—	—		4482中	13面	
6	土師器	甕	B77(礎土)	18.0	—	—	ヨコナテ	ヘラナズリ	—	ヨコナテ	磨滅	—	—	紐上一枚跡多数混入	1274中	7層下	

第 6 図 SI01 竪穴住居跡 出土遺物(1)



番号	種類	器種	出土層位	計測値 (cm)			外観調査		内面調査		底面調査	備 考	発掘番号	写真図版
				口径	器高	底径	口縁部	体部上平	体部下平	口縁部				
1	土師器	甕	中マ下段上	12.00	—	—	ヨコナデ	ヘラナズリ	—	ヨコナデ	ナデ(ヘナリ)	—	416	9層上
2	土師器	甕	中マ下段上	22.00	—	—	ヨコナデ	ナデ(ヘナリ)	—	ヨコナデ	ナデ	—	87	8層上
3	土師器	甕	中マ下段上	20.00	—	—	ヨコナデ	ナデ(ヘナリ)	—	ヨコナデ	ナデ	—	442	8層上
4	土師器	甕	中マ下段上	13.00	—	—	ヨコナデ	厚減	—	ヨコナデ	ヘラナズリ	—	854カ	7層下
5	土師器	甕	中マ下段上	18.00	—	—	ヨコナデ	ヘラナズリ	—	ヨコナデ	ナデ(ヘナリ)	—	131	7層下
6	土師器	甕	中マ下段上	20.00	—	—	ヨコナデ	厚減	—	ヨコナデ	ナデ(ヘナリ)	—	313	6層上
7	土師器	甕	中マ下段上	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ヘナリ)	—	—	—	—	123	7層上
8	土師器	甕	中マ下段上	—	—	6.00	—	ヘラナズリ	—	ナデ(ヘナリ)	厚減	西面一スス付着	428	9層上
9	土師器	甕	中マ下段上	—	—	9.00	—	厚減	—	ナデ(ヘナリ)	厚減	ボマ下支脚に配列	524	13層上
10	土師器	甕	中マ下段上	—	—	10.00	—	ヘラナズリ	—	ヘラナズリ	ヘラナズリ	—	103	9層上
11	土師器	甕	中マ下段上	—	—	7.00	—	ナデ(ヘナリ)	—	ナデ(ヘナリ)	厚減	西面一スス付着	129	9層上
12	土師器	甕	中マ下段上	—	—	8.00	—	厚減	—	厚減	厚減	西面一スス付着	7612カ	9層上
13	土師器	甕	中マ下段上	—	—	4.00	—	ヘラナズリ	—	厚減	厚減	西面一スス付着	8212カ	9層下

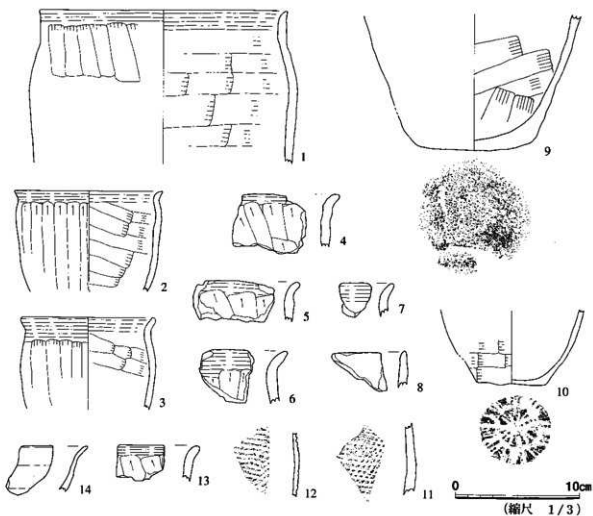
第7図 SI01竪穴住居跡 出土遺物(2)



番号	種類	器種	出土層位	計測値 (cm)			外面調整		内面調整		備考	整理番号	写真図版
				長さ	幅	厚さ	口縁部	底部	口縁部	底部			
1	土師器	埴	977(地1)	36.0	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	内面一次付着	161	8回下
2	土師器	埴	977(地1)	—	—	12.0	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	—	—	内面一次付着	113	9回上
3	土師器	埴	977(地2)	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	内面一次付着	436	7回上
4	土師器	埴	977(地1)	14.0	5.8	6.5	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	88	7回上
5	土師器	埴	P1	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	384	7回上
6	土師器	埴	K01	16.0	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	386	8回上
7	土師器	埴	K01	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	541	7回上
8	土師器	埴	K02	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	539	7回上
9	土師器	埴	K02	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	538	7回上
10	土師器	埴	K02	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	607	7回上
11	土師器	埴	K02	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	517	8回下
12	土師器	埴	K03	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	536	7回上
13	土師器	埴	K03	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	560	8回下
14	土師器	埴	K03	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	559	8回下
15	土師器	埴	K03	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	550	8回下
16	土師器	埴	K03	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	胎土一様長巾織成	535(13)	8回下

番号	種類	器種	出土層位	計測値 (cm)			重量 (g)	備考	整理番号	写真図版
				長さ	幅	厚さ				
17	鉄製品	刀子	K03	14.3	0.5~1.7	0.3~1.0	18.8		7	13(1)

第 8 図 SI01 竪穴住居跡 出土遺物(3)



番号	種類	器種	出土層位	計測値 (cm)			内面調整			外面調整			備考	整理番号	写真図版	
				口径	器高	底径	口縁部	杯縁上半	杯縁下半	口縁部	杯縁上半	杯縁下半				
1	土師器	甕	麻布	(20.6)	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナ?)	—	ヨコナデ	ナデ(ハナ?)	—	—	60	7面下	
2	土師器	甕	麻布	(12.6)	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	ナデ(ハナ?)	—	—	新十一号機多数混入	132カ	8面下
3	土師器	甕	麻布	(11.6)	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナ?)	—	ヨコナデ	ナデ(ハナ?)	—	—	404	7面上	
4	土師器	甕	麻布	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	—	粘土一砂機多数混入	73	7面上
5	土師器	甕	麻布	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	ナデ(ハナ?)	—	—	新十一号機多数混入	306	7面上
6	土師器	甕	麻布	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	ナデ(ハナ?)	—	—	59	7面上	
7	土師器	甕	麻布	—	—	—	ヨコナデ	—	—	ヨコナデ	—	—	—	23	7面上	
8	土師器	甕	麻布	—	—	—	不明	—	—	磨減	—	—	—	—	7面上	
9	土師器	甕	麻布	—	—	9.6	—	—	磨減	—	—	ナデ(ハナ?)	—	外品一スス・炭化物付着	22	7面上
10	土師器	甕	麻布	—	—	5.6	—	—	ナデ(ハナ?)	—	—	磨減	新目録収載	内品一スス付着	1642カ	6面上
11	土師器	甕	麻布	—	—	—	ナデ(ハナ?)	—	—	ヘラケズリ	—	—	—	五所川原産	14	8面下
12	土師器	甕	麻布	—	—	—	ナデ(ハナ?)	—	—	ヘラケズリ	—	—	—	五所川原産	835	8面下
13	土師器	甕	麻布	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	磨減	—	—	536	7面上	
14	土師器	甕	麻布	—	—	—	ロケロ	ロケロ	—	磨減	磨減	—	—	837	7面上	

第9図 SI01竪穴住居跡 出土遺物(4)

浅くなっている。K04からは土師器甕片5点が出土している。

〔カマド〕カマドは南壁西側に位置する。周辺には焼土層が広がり、焼土層の底面は赤変して焼き締まっている。煙道は半地下式で、住居外に幅60cm、長さ65cmで続いており、浅い溝状を呈する。煙道部の底面も赤変しており、また良く焼き締まっている。焚口部には、半分に欠損した土師器甕が底面を上向けにした状態で、カマドの支脚代わりに再利用されている。なお、周辺の焼土層中からは、土師器甕片98点、坏片3点、銅片4点、粘土ブロックなど多数の遺物が出土している。また、人頭大の角礫・板状礫が12点ほど出土しており、カマドのソデに芯材として利用されていたものと思われる。カマドの支脚前面の床面直上からは、少なくとも3個体分の土師器甕が折り重なって出土している。また、煙道部先端からは土師器甕がまとまって出土しており、カマドの廃棄時に伴って投げ捨てたものと推される。

〔出土遺物〕本住居跡に伴う遺物は、カマド周辺の焼土層遺物、及び床面直上遺物、底面から検出された土坑出土遺物であり、これらは廃絶に伴う住居一括資料と言えよう。土師器は甕が圧倒的に多く、わずかに鍋と底部無調整の坏が伴う。また、鉄製品の刀子1点や五所川原産須恵器の壺甕もわずかに出土している。

SI02 堅穴住居跡（第10～12図）

東西に伸びる農道に接しているため、堅穴住居跡の南西部が一部未検出となっている。そこで、東西及び南北方向に観察用の畦を設け、順次掘り進めていった。

〔位置〕調査区の南端、グリットX0～3、Y16～20に位置する。

〔平面形・規模〕東壁3m20cm、北壁3mを測る。西壁・南壁は農道に遮られて判然としない。南北にやや長いものの、ほぼ方形を呈すると言ってよい。床面積は約9.6㎡である。

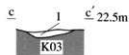
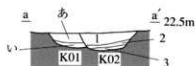
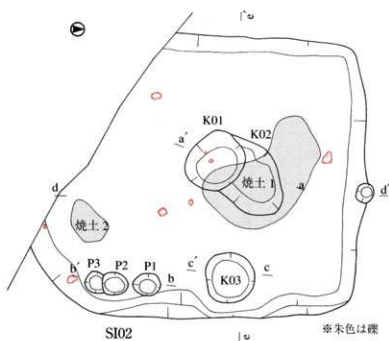
〔壁・床面〕壁の高さは、東壁28～29cm、西壁21～22cm、南壁は不明、北壁26～28cmを測り、壁は床面から緩やかに立ち上がる。

〔床面の遺構〕床面から土坑3基（K01～K03）、ピット3ヶ（P1～P3）、焼土ブロック（焼土2）を確認することができた。K01はK02よりも新しい。K01は65×58cmとやや楕円形を呈する。深さは20cmとなる。K03は径50cmほどの円形を呈する。深さは6～9cmと浅い。P1～P3は径23～29cmでほぼ円形を呈し、深さはP1が14cm、P2・P3はそれぞれ5cmと非常に浅い。

〔堆積土〕堆積土は3層を基本とする。1層には、焼土や炭化物が多量に混入するほか、火山灰もわずかにブロック状に混入する二次堆積である。1層中には焼土ブロックが面的に集中して認められる箇所があった（焼土1）。2層には1cm大の炭化物が混入するほか、火山灰もわずかにブロック状に混入する。3層にも火山灰がわずかにブロック状に混入する。遺物は1・2層からの出土が多い。

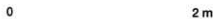
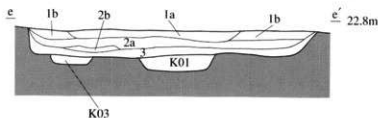
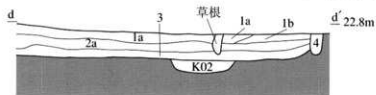
〔出土遺物〕覆土中からは、土師器甕片43点・坏片2点・銅片1点、土製品の支脚片3点、軽石3点、礫9点が出土している。また、床面直上からは土師器甕片2点が出土しているだけであった。

〔遺構の性格〕他の堅穴住居跡よりも規模が小さく、床面積が少ないこと。また、壁面が緩やかに立ち上がり、壁際に周溝を巡らせていないことなどから、住居跡ではない可能性が考えられる。



SI02-K03層位 c-c'

No	土色	土質	しまり	保水性	備考
1	10YR4/4 褐色	シルト	ややハード	あり	ロームブロック混入



(縮尺 1/40)

SI02-K01・K02層位 a-a'

No	土色	土質	しまり	保水性	備考
K01	あ 10YR4/4 褐色	シルト	ややハード	あり	ロームブロック混入
	い 10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	ややハード	あり	
K02	1 10YR3/4 暗褐色	シルト	ややハード	あり	ロームブロック混入
	2 10YR6/6 明黄褐色	シルト	ややハード	あり	ローム層
	3 10YR2/1 黒色	シルト	ソフト	あり	ローム層

SI02-P1・P2・P3層位 b-b'

No	土色	土質	しまり	保水性	備考
P1	1 10YR4/4 褐色	シルト	ややハード	あり	ロームブロック混入
	2 10YR6/6 明黄褐色	シルト	ややハード	あり	ローム層
P2	1 10YR4/4 褐色	シルト	ややハード	あり	ロームブロック混入
	3 10YR4/4 褐色	シルト	ややハード	あり	ロームブロック混入

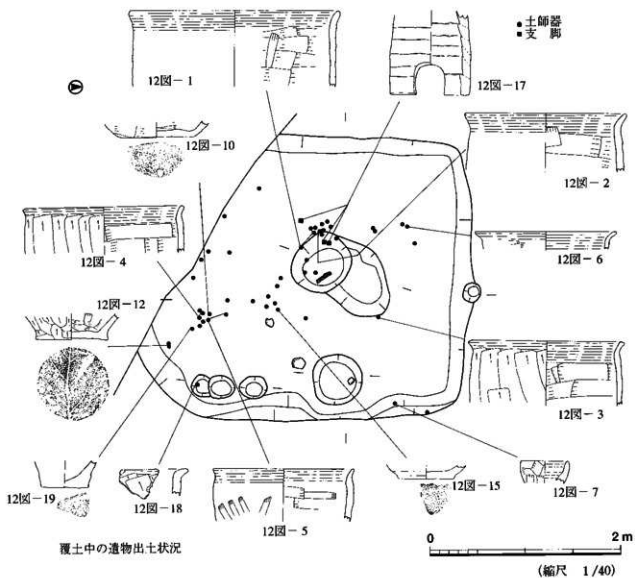
SI02 南北壁層位 d-d'

No	土色	土質	しまり	保水性	備考
1a	10YR3/4 暗褐色	シルト	ややハード	あり	壁上に炭化物10~20%混入・火山灰ブロック状に混入 火山灰ブロック状に混入
1d	10YR4/4 褐色	シルト	ややハード	あり	
2a	10YR3/3 暗褐色	シルト	ややハード	あり	
4	10YR2/3 黒褐色	シルト	ややハード	あり	

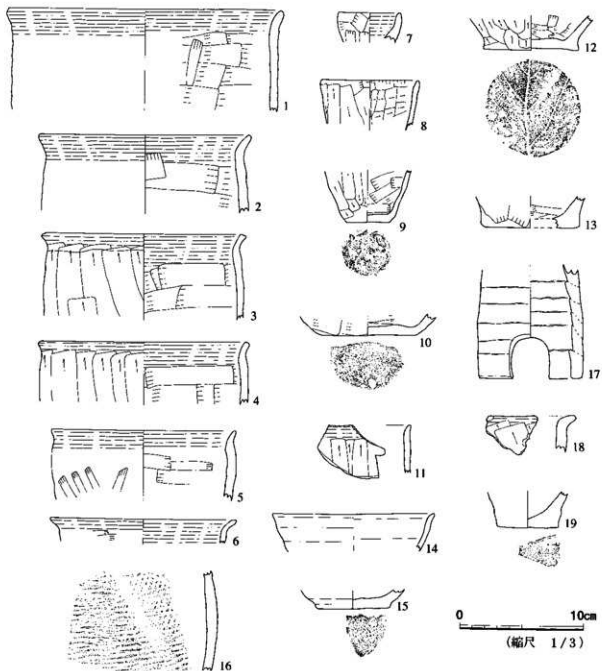
SI02 東西壁層位 e-e'

No	土色	土質	しまり	保水性	備考
1a					南北壁層位と対応
1b					
2a					
2b	10YR3/4 暗褐色	シルト	ややハード	あり	炭化物ブロック状に1cm以上混入 南北壁層位と対応
3					

第10図 SI02竪穴住居跡(1)



第11圖 SI02竪穴住居跡(2)



番号	種類	基層	出土層位	計測値 (cm)			片断位置			底面調整	備考	整理番号	写真図版		
				口径	高さ	底径	口縁傾	縁線上半	縁線下半					口縁部	縁線上半
1	土師器	美	層上	(22.0)	—	—	ヨコナデ	厚底	—	ヨコナデ	ナリハナリ	—	162口	9層下	
2	土師器	美	層上	(17.0)	—	—	ヨコナデ	厚底	—	ヨコナデ	ナリハナリ	—	570口	9層下	
3	土師器	美	層上	(16.5)	—	—	ヨコナデ	ヘラナリ	—	ヨコナデ	ナリハナリ	—	西所第一スズ・表底付片	362	9層下
4	土師器	美	層上	(17.0)	—	—	ヨコナデ	ヘラナリ	—	ヨコナデ	ナリハナリ	—	143口	9層下	
5	土師器	美	層中	(15.0)	—	—	ヨコナデ	ナリハナリ	—	ヨコナデ	ナリハナリ	—	西所第一スズ付着	147口	9層下
6	土師器	美	層中	(15.0)	—	—	ヨコナデ	ナリハナリ	—	ヨコナデ	ナリハナリ	—	386	9層下	
7	土師器	美	層上	(8.0)	—	—	ナリハナリ	ナリハナリ	—	ヨコナデ	ナリハナリ	—	輪縁部あり	840	9層下
8	土師器	美	層上	(8.0)	—	—	ヨコナデ	ヘラナリ	—	ナリハナリ	ヘラナリ	—	840	9層下	
9	土師器	美	層上	—	—	3.5	—	—	ヘラナリ	—	ナリハナリ	ヘラナリ	343	9層下	
10	土師器	美	層中	—	—	8.0	—	—	ナリハナリ	—	ナリハナリ	厚底	148	9層下	
11	土師器	美	層中	—	—	—	ヨコナデ	ヘラナリ	—	ヨコナデ	厚底	—	西所第一スズ付着	541	9層下
12	土師器	美	層上	—	—	7.7	—	—	ヘラナリ	—	ナリハナリ	厚底	141	9層下	
13	土師器	美	層上	—	—	(8.0)	—	—	ヘラナリ	—	ナリハナリ	厚底	342	9層下	
14	土師器	美	層中	(13.0)	—	—	ヨコナデ	厚底	—	ナリハナリ	ヘラナリ	—	371	9層下	
15	土師器	灰	層上	—	—	(4.0)	ヨコナデ	厚底	—	—	—	—	139	9層下	
16	須恵器	美	層中	—	—	—	タタキ出	厚底	—	—	厚底	—	155	9層下	
18	土師器	美	層上	—	—	—	ヨコナデ	ヘラナリ	—	ヨコナデ	ヘラナリ	—	山所片取	338	9層下
19	土師器	灰	層上	—	—	(5.0)	—	—	厚底	—	厚底	—	461	9層下	
													480	9層下	

第12図 SI02竪穴住居跡 出土遺物

SI03竪穴住居跡（第13～17図）

〔位 置〕 調査区の南端，グリットX-6～-13，Y22～28に位置する。

〔平面形・規模〕 東壁5m，西壁5m10cm，南壁4m，北壁4m50cmを測り，南北にやや長いものの，ほぼ方形を呈する。床面積は約20～23㎡である。

〔壁・床面〕 壁の高さは，東壁19～45cm，西壁21～32cm，南壁22～31cm，北壁23～30cmを測り，壁は床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

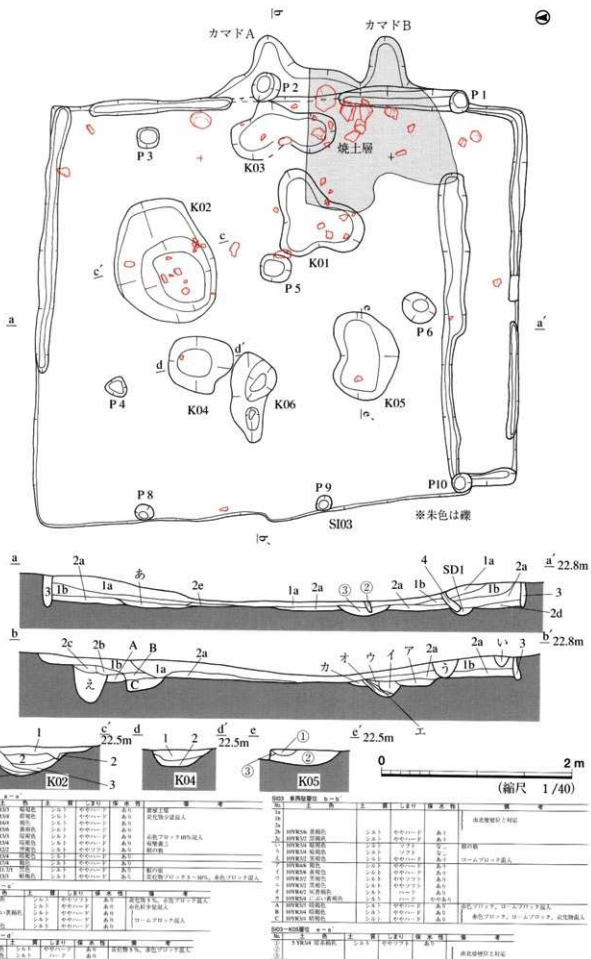
〔周 溝〕 周溝は西壁以外の壁に沿って巡っている。幅10～20cm，床面からの深さ5～10cmを測る。なお，周溝に沿って，径15～20cmの支柱穴と推されるピット（P1・P8～10）が検出されている。また，南壁に沿って住居内に幅10～30cm，深さ5cm，長さ3m20cmの東西溝が認められる。これは古い時期の竪穴住居跡の周溝と思われる。つまり，SI03はのちに南側に拡張されたものと推測できる。

〔床面の遺構と遺物〕 床面から土坑6基（K01～K06），ピット10ヶ（P1～P10）を確認することができた。K01・K03・K06は不整形となる。K01・K03の断面は浅く，皿型を呈する。K02は東西1m35cm，南北1m05cmのやや不整な楕円形を呈する。底面は西側が最も低く，壁は段差をもって立ち上がる。K05は東西90cm，南北60cmのやや不整な楕円形を呈する。深さは15cmほど，底面は平坦で，断面形は皿型を呈する。K01からは土師器甕片6点・坏片1点が出土している。K02からは土師器甕片47点・坏片4点・鍋片7点，土製支脚片2点のほか，粘土ブロック3点，礫7点も出土している。K03からは土師器甕片23点・坏片1点のほか，粘土ブロック1，礫1点が出土している。K04からは土師器甕片3点のほか，礫1点が出土している。K05からは土師器甕片22点，土製支脚片3点のほか，礫1点が出土している。K06からは土師器甕片2点が出土している。

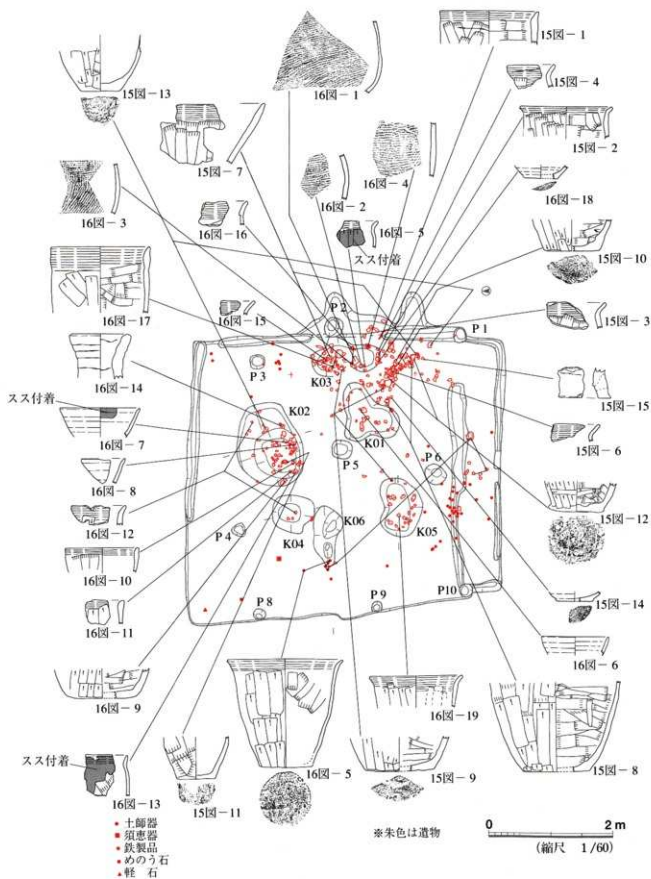
〔カマド〕 カマドは東壁に位置する。煙道部を伴うカマドAとカマドBの2者がある。カマドBの周辺には焼土層が広がり，焼土層の底面は赤変して焼き締まっている。よって，カマドAが古く，カマドBが新しいものと推される。カマドの煙道はそれぞれ半地下式で，カマドBは住居外に幅40cm，長さ50cmで続いており，浅い溝状を呈する。カマドBの底面も赤変しており，また良く焼き締まっている。なお，カマドB内と周辺の焼土層中からは，土師器甕片89点，坏片1点，鍋片1点，須恵器甕片5点，土製支脚片3点のほか，礫19点が出土している。また，礫は人頭大の角礫・板状礫であり，カマドのソデに芯材として利用されていたものと思われる。

〔堆積土〕 堆積土は2層を基本とする。1層は腐植土層で炭化物がわずかに混じる暗褐色のシルト土である。2層はa～e層に細分されるが，黄褐色を中心としたシルト土である。各層からは火山灰の混入は認められなかった。

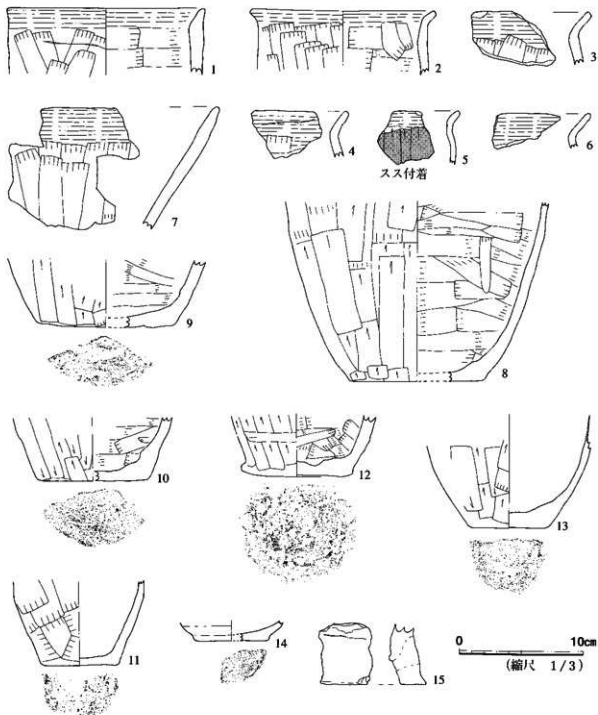
〔出土遺物〕 本住居跡に伴う遺物は，カマドB内と周辺の焼土層遺物，及び床面直上遺物，床面から検出された土坑出土遺物であり，これらは住居の廃絶に伴う一括資料と言えよう。土師器は甕が圧倒的に多く，わずかに鍋と坏が伴う。また，須恵器壺甕もわずかに出土している。なお，覆土中からは土師器甕片85点・坏片1点・鍋片3点，須恵器甕片1点，礫18点，粘土ブロック3点が出土している。また，床面直上からは土師器甕片10点・鍋片1点，礫2点が出土している。



第13図 SI03竪穴住居跡(1)



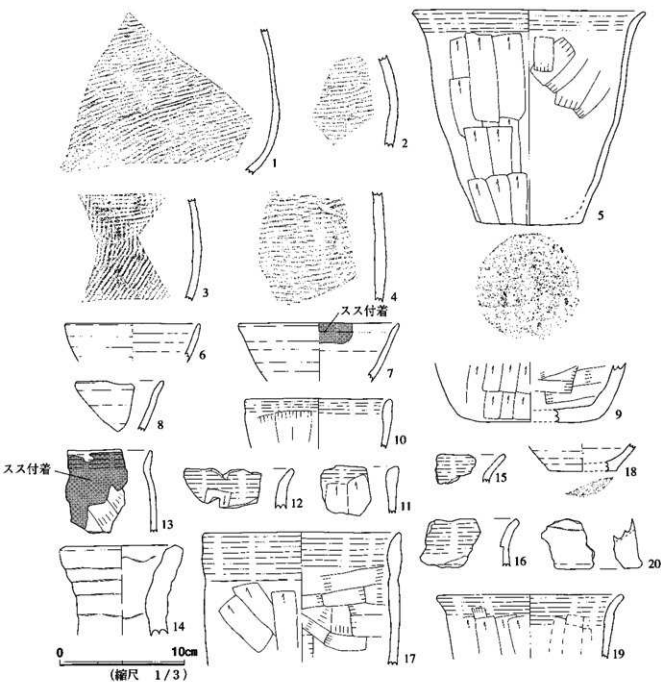
第14図 SI03竪穴住居跡(2) 床面検出遺構及び焼土層の遺物出土状況



番号	種類	素材	出土層位	計測値 (cm)			外装状態			内面調整			備考	整理番号	写真図版	
				口径	高さ	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半				底面調整
1	土師器	灰	焼土層 I	(16.0)	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	—	—	外周輪郭破	622	10図下
2	土師器	灰	焼土層 I	(15.0)	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	—	—	—	631図上	10図上
3	土師器	灰	焼土層 I	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	—	—	—	269	10図上
4	土師器	灰	焼土層 I	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	—	—	外周輪郭破	220	10図上
5	土師器	灰	焼土層 I	—	—	—	ヨコナデ	ヘタケズリ	—	ヨコナデ	—	—	—	—	227	10図上
6	土師器	灰	焼土層 I	—	—	—	ヨコナデ	—	—	ヨコナデ	—	—	—	—	273	10図上
7	土師器	灰	焼土層 I	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ハナリ)	—	ヨコナデ	—	—	—	—	201図上	10図上
8	土師器	灰	焼土層 I	—	(11.0)	—	—	ナデ(ハナリ)	—	ナデ(ハナリ)	—	ヘタケズリ	—	—	216図上	10図上
9	土師器	灰	焼土層 I	—	(11.0)	—	—	ヘタケズリ	—	—	ナデ(ハナリ)	ヘタケズリ	—	—	631図上	11図下
10	土師器	灰	焼土層 I	—	(9.0)	—	—	ヘタケズリ	—	—	ナデ(ハナリ)	ヘタケズリ	—	—	267	11図下
11	土師器	灰	焼土層 I	—	6.0	—	—	ナデ(ハナリ)	—	—	—	—	—	—	6702図上	11図下
12	土師器	灰	焼土層 I	—	9.0	—	—	ヘタケズリ	—	—	ナデ(ハナリ)	ヘタケズリ	—	—	2164図上	11図下
13	土師器	灰	焼土層 I	—	6.0	—	—	ヘタケズリ	—	—	—	—	—	—	1922図上	11図下
14	土師器	灰	焼土層 I	—	(6.0)	—	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	—	—	—	240	10図上

番号	種類	出土層位	計測値 (cm)			重量 (g)	特徴	備考	整理番号	写真図版
			長さ	幅	厚さ					
15	支脚	焼土層 I	(4.8)	(3.7~4.2)	1.2~2.3	53.4	輪郭破	—	204	10図上

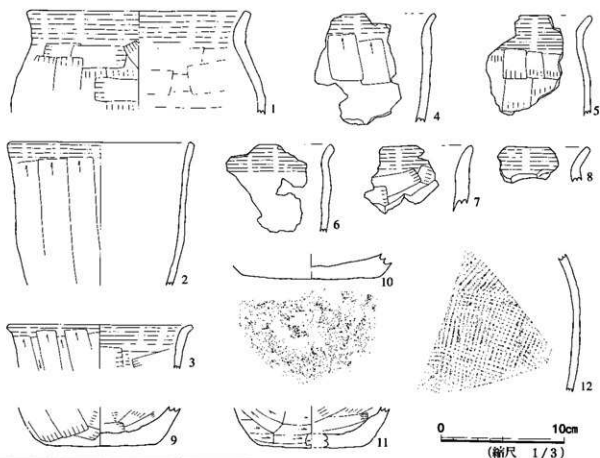
第15図 SI03竪穴住居跡 出土遺物(1)



番号	種類	器種	出土層位	計測値 (cm)			外面調整		内面調整		底面調整	備 考	整理番号	写真図版		
				口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部					体部上半	体部下半
1	埴土器	蓋	地上層1	—	—	—	—	チタキ目	—	ヘラナデ	—	五所川原産	639	11層上		
2	埴土器	釜	地上層1	—	—	—	—	チタキ目	—	ヘラナデ	—	五所川原産	642	11層上		
3	埴土器	蓋	地上層1	—	—	—	—	チタキ目	—	ヘラナデ	—	五所川原産	638	11層上		
4	埴土器	蓋	地上層1	—	—	—	—	チタキ目	—	ヘラナデ	—	五所川原産	635	11層上		
5	土師器	蓋	6a層	118.8	17.7	8.5	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	チタキ目	摩滅	ヘラナデ	内面—スス付着、筋—筋線跡	3125	13層
6	土師器	杯	K04	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	482	10層上	
7	土師器	杯	K02	163.0	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	内面—スス付着、筋—筋線跡	806	10層上	
8	土師器	杯	K02	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	800	10層上	
9	土師器	蓋	K02	—	—	116.0	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	チタキ目	ヘラナデ	814	10層下
10	土師器	蓋	K02	—	—	—	ヨコナデ	チタキ目	—	ヨコナデ	摩滅	—	—	736	10層上	
11	土師器	蓋	K02	—	—	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	摩滅	—	—	—	818	10層上	
12	土師器	蓋	K02	—	—	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	ヨコナデ	—	—	—	687	10層上	
13	土師器	蓋	K02	—	—	—	ヨコナデ	チタキ目	—	ヘラナデ	摩滅	—	内面—スス付着、筋—筋線跡	834	10層上	
14	土師器	蓋	K03	—	—	—	ヨコナデ	—	—	ヨコナデ	—	—	—	766	10層上	
15	土師器	蓋	K02	—	—	—	ヨコナデ	—	—	ヨコナデ	—	—	—	760	10層上	
16	土師器	蓋	K02	—	—	—	ヨコナデ	—	—	ヨコナデ	—	—	—	757	10層上	
17	土師器	蓋	K03	116.0	—	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	ヨコナデ	チタキ目	—	—	231	10層上	
18	土師器	杯	K03	—	—	1.5	ヨコナデ	ヘラナデ	—	ヨコナデ	チタキ目	—	—	757	10層上	
19	土師器	蓋	K05	115.0	—	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	—	353	なし	

番号	種類	出土層位	計測値 (cm)			重量 (g)	特徴	備考	整理番号	写真図版
			長さ	幅	厚さ					
14	支脚	K02	(7.1)	7.0~10.0	0.9~1.8	128.8	輪線跡	695	10層上	
20	支脚	K05	(4.0)	(3.5)	(1.5~1.3)	27.8	輪線跡	752	10層上	

第16図 SI03竈穴住居跡 出土遺物(2)



番号	種類	器種	出土層位	計測値 (cm)			外周形状			内周形状			備考	整理番号	写真図版	
				口径	器高	底径	口縁部	体部上平	体部下平	口縁部	器部上平	器部下平				底面形状
1	土師器	甕	層上	(18.0)	—	—	ヨコナデ	ナデ(ナ?)	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	—	306	10図下	
2	土師器	甕	層上	(15.0)	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	厚底	—	—	283口か	10図下	
3	土師器	甕	層上	(15.0)	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	ナデ(ナ?)	—	—	337	10図下	
4	土師器	坏	層上	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	厚底	—	—	296口か	10図上	
5	土師器	甕	層上	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ナ?)	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	—	796口か	10図上	
6	土師器	甕	層上	—	—	—	ヨコナデ	厚底	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	—	新七一砂埴多数混入	335	10図上
7	土師器	甕	層上	—	—	—	ヨコナデ	ナデ(ナ?)	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	—	—	—	
8	土師器	甕	層上	—	—	—	ヨコナデ	—	—	ヨコナデ	—	—	—	—	—	
9	土師器	甕	層上	—	—	(9.0)	—	—	ナデ(ナ?)	—	ヘラケズリ	—	—	793	11図下	
10	土師器	甕	層上	—	—	(11.0)	—	—	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	—	348口か	11図下	
11	土師器	甕	層上	—	—	(9.0)	—	—	ヘラケズリ	—	ナデ(ナ?)	ヘラケズリ	—	新七一砂埴多数混入	307口か	11図下
12	土師器	甕	層上	—	—	—	タタキ目	—	—	ヘラナデ	—	—	—	315	11図上	

第17図 SI03竪穴住居跡 出土遺物(3)

SI04竪穴住居跡 (第18~20図)

調査前にすでにSI04の西側大半が破壊されていることが明らかだったので、観察用の畦を残すことなく、完掘を行った。

〔位置〕調査区の南端、グリットX-34~39, Y16~20に位置する。

〔平面形・規模〕東壁 4 m30cmを測る。遺構の大半が破壊されており、平面形は定かではないが、恐らく方形を呈するものだろう。

〔壁・床面〕壁の高さは、東壁29~42cmを測り、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。

〔周溝〕周溝は壁に沿って巡り、幅10~20cm、床面からの深さ10~15cmを測る。

〔床面の遺構と遺物〕床面から土坑4基（K01～K04）、ピット3ヶ（P1～P3）を確認することができた。K01は東西82cm、南北45cmのやや不整な楕円形を呈する。深さは25cmで底面はやや平坦で、断面形は皿型を呈する。覆土には多量の焼土粒が混入している。K02はK03よりも新しい。K02は東西60cm、南北43cmのやや不整な楕円形を呈する。深さは13cmほどと浅く、断面形は皿型を呈する。K03は東西67cm、南北30cmのやや不整な楕円形を呈する。深さは5cmほどと浅く、断面形は皿型を呈する。K04は東西50cm、南北80cmの不整な楕円形を呈する。深さは15cmほどと浅く、断面形は皿型を呈する。覆土には多量の焼土粒が混入している。

なお、K01からは土師器甕片14点、須恵器の長頸壺片1点・甕片1点のほか、碟4点が出土している。K02からは土師器甕片7点、須恵器の長頸壺片1点が出土している。K04からは土師器甕片2点が出土している。

〔カマド〕カマドは東壁南側に位置する。カマド内には焼土層が広がり、焼土層の底面は赤変して焼き締まっている。煙道は半地下式で、住居外に幅48cm、長さ80cmで続いており、浅い溝状を呈する。煙道部の底面も赤変しており、また良く焼き締まっている。焚口部には、半分に欠損した土師器甕が底面を上向きにした状態で、カマドの支脚代わりに転用されている。なお、カマド内からは、土師器甕片12点のほか、碟1点が出土している。また、人頭犬の角礫・板状礫はカマドのソデに芯材として利用されていたものと思われる。

〔出土遺物〕本住居跡に伴う遺物は、カマド内の遺物や床面直上の遺物、さらに底面から検出された土坑の出土遺物であり、これらは住居廃絶に伴う一括資料と言える。土師器は甕が圧倒的に多く、わずかに坏が伴う。また、須恵器の長頸壺・甕もわずかに共伴している。

SX01焼成遺構（第21・22図）

〔位置〕調査区の南側、グリットX-6～10、Y18～20に位置する。

〔平面形・規模〕K01とK02とした土坑状の遺構が重なり合う。K01は径80cmほどのやや不整な円形となり、多量の焼土や炭化物が混入する。平面プランでは、焼土が「コの字」状に巡っていることが確認できた。また、K01の底面は被熱によって赤変している。K02は南北98cmの不整な円形で、深さは20cmと浅く、断面形は皿型を呈する。

〔出土遺物〕K01からは1個体分の土師器甕（18点）と、下層から完形の土師器坏が底面を上にした状態で検出された。恐らくカマドの支脚として転用された可能性が考えられる。

〔遺構の性格〕多量の焼土の検出や土師器坏の検出状況から、野外に設置されたカマド状遺構と推測される。

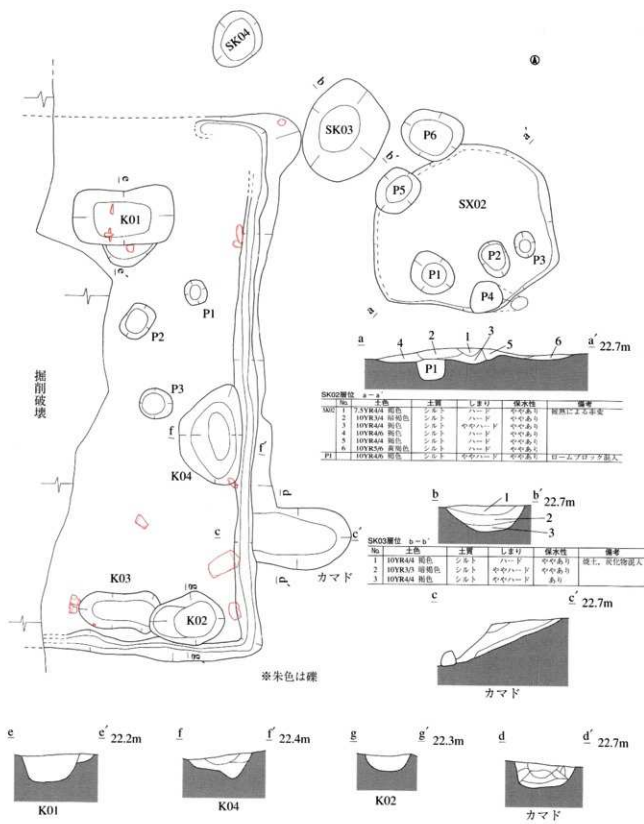
SX02焼成遺構（第18・19図）

〔位置〕調査区の南側、グリットX-15～18、Y33～35に位置する。また、SI04壁穴住居の東側に隣接した位置にある。

〔平面形・規模〕東西1m40cm、南北1m30cmの不整な円形を呈する。深さは5～10cmと浅い。底面からは柱穴や赤変した焼土面を2箇所確認できた。

〔出土遺物〕SX02からは、土師器甕片10点のほか、軽石2点が出土している。

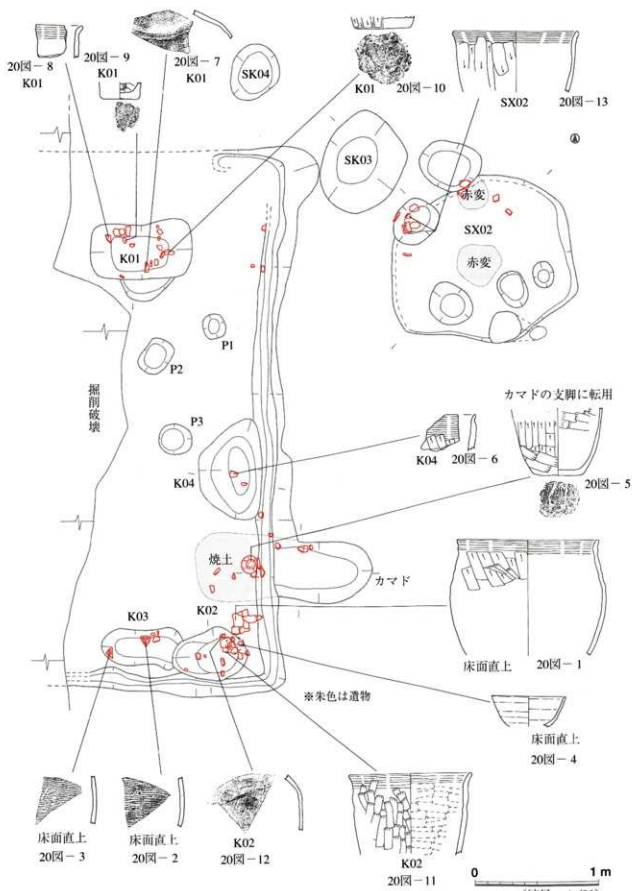
〔遺構の性格〕遺構の性格は判然としなかったが、何らかの焼成活動を行っている。



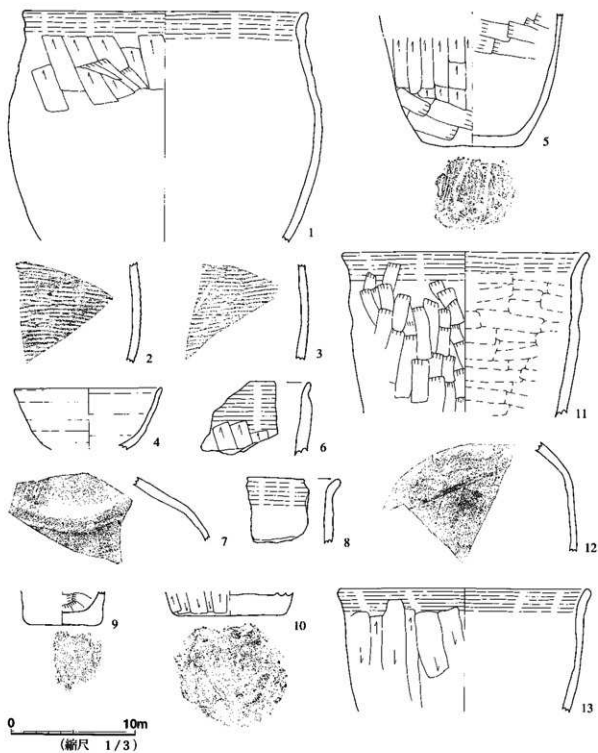
※ 土色の記入もれのため、記載なし。
(K01・K04・K02・カマド)



第18図 SI04竪穴住居跡・SX02焼成遺構(1)

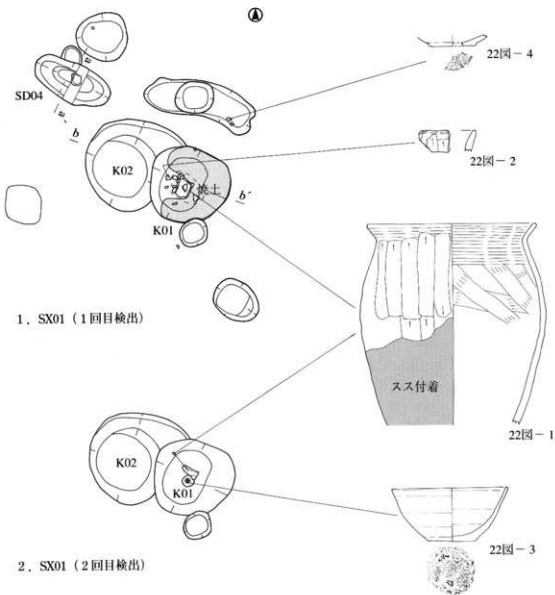


第19図 S104竪穴住居跡・SX02焼成遺構(2)



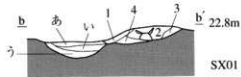
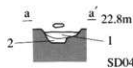
番号	種類	器種	出土層位	計測値 (cm)			外面調整			内面調整			底面調整	備 考	整理番号	写真図版
				口径	器高	底径	口縁部	縁部上平	縁部下平	口縁部	体部上平	体部下平				
1	十割器	甕	Ⅱa点	23.0	—	—	ヨコナデ	ヘラナズリ	—	ヨコナデ	—	—	—	筋十一砂器多数混入	357	126上
2	鉢	甕	Ⅱa点	—	—	—	—	タタキ目	—	—	ヘラナデ	—	—	五所川原産	363	126下
3	鉢	甕	Ⅱa点	—	—	—	—	タタキ目	—	—	ヘラナデ	—	—	山所川原産	364	126上
4	七割器	片	Ⅱa点	12.0	—	—	ロクロ	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	筋十一巻褐色	358	126上
5	十割器	甕	Ⅱa下	—	—	8.0	—	—	ヘラナズリ	—	ナデナデ	ヘラナズリ	—	サマノ文層に転写	349	130
6	上割器	甕	K04	—	—	—	ヨコナデ	ヘラナズリ	—	—	—	—	—	—	383	126上
7	灰土器	長頸甕	K01	—	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	ヘラナズリ, 山所川原産	494	126上
8	十割器	甕	K01	—	—	—	ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	400	126上
9	十割器	甕	K01	—	—	6.0	—	—	—	—	—	—	—	—	483	126上
10	上割器	甕	K01	—	—	9.0	—	—	—	—	—	—	—	—	491	126上
11	上割器	甕	K02	23.0	—	—	ヨコナデ	ナデナデ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	—	筋十一砂器多数混入	499	126上
12	割半器	長頸甕	K02	—	—	—	—	399ナズリ	—	—	ロクロ	—	—	山所川原産	501	126上
13	十割器	甕	SX02	23.0	—	—	ヨコナデ	ヘラナズリ	—	ヨコナデ	—	—	—	筋十一砂器多数混入	595	126上

第20図 SI04竪穴住居跡・SX02焼成遺構 出土遺物



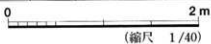
1. SX01 (1回目検出)

2. SX01 (2回目検出)

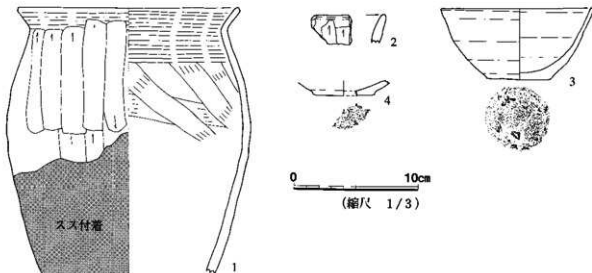


SD04層位 a-a'		土質	しまり	保水性	備考
1	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	ややハード	あり	地山ロームブロック状に混入
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	ややハード	あり	

SX04層位 b-b'		土色	土質	しまり	保水性	備考
K01	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	ややソフト	あり	塊土。灰化物混入 焼土50%混入・灰原
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	ややハード	あり	
	3	10YR4/4 褐色	シルト	ハード	ややあり	
	4	2.5YR4/6 赤褐色	シルト	ハード	ややあり	
K02	あ	10YR4/4 褐色	シルト	ややハード	あり	ロームブロック混入
	い	10YR2/3 黒褐色	シルト	ややソフト	あり	
	う	10YR4/4 褐色	シルト	ややハード	あり	



第21図 SX01焼成遺構



番号	種類	器種	出土層位	計測値 (cm)			外面調整			内面調整			底面調整	備 考	整理番号	写真図録
				口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半				
1	土師器	蓋	ホマド	18.0	—	—	ヨコナデ	ヘラタヌイ	—	ヨコナデ	ナデ(ヘラ?)	—	—	外面にスス状炭化物付着	6112か	13図
2	土師器	蓋	ホマド	—	—	—	ヨコナデ	ヘラタヌイ	—	ヨコナデ	—	—	—	—	609	12図丁
3	土師器	杯	ホマド	12.4	5.8	5.2	ロタロ	ロタロ	ロタロ	ロタロ	ロタロ	ロタロ	特殊漆塗り	高安部、ホマドの支脚に配属	725	13図
4	土師器	杯	SD04	—	—	(5.0)	—	—	—	—	—	異色	特殊漆塗り	617	12図下	

第22図 SX01焼成遺構 出土遺物

b 縄文時代の遺構

SD02溝状遺構 (第23図)

〔位 置〕 調査区の南端，グリットX0～2，Y24～28に位置する。

〔平面形・規模〕 溝状を呈する。確認面では長さ3m40cm，幅50～90cm，深さ1m40cmを測る。底面では長さ3m80cm，幅25cmを測る。

〔壁・底面〕 短軸の断面形を見ると，上部は皿形に開く形状であるが，途中から垂下する。底面は平坦となる。

〔堆積土〕 12層に区分された。1～7層までは腐植土層となっている。各層からは地山ロームがブロック状に混入している。出土遺物はなし。

〔性格と時期〕 形態から縄文時代の落とし穴と思われるが，詳細な時期は不明である。

SD03溝状遺構 (第23図)

〔位 置〕 調査区の南端，グリットX0～2，Y39～43に位置する。

〔平面形・規模〕 溝状を呈する。確認面では長さ3m80cm以上，幅70～90cm，深さ1m10cmを測る。底面では長さ4m以上，幅12cmを測る。

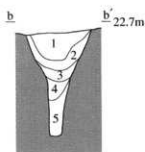
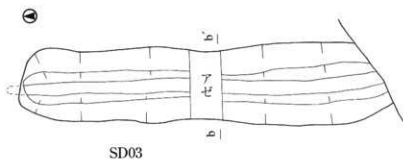
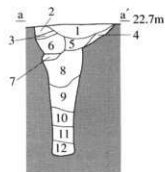
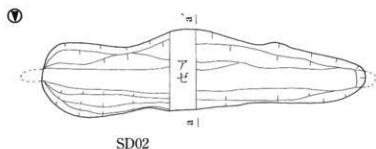
〔壁・底面〕 短軸の断面形を見ると，上部はすり鉢形に開く形状であるが，中位から垂下する。底面は平坦となる。

〔堆積土〕 5層に分かれる。1～3層までは腐植土層となっている。出土遺物はなし。

〔性格と時期〕 形態から縄文時代の落とし穴と思われるが，詳細な時期は不明である。

5. 遺構外出土遺物

本調査区域内において，平安時代の土師器や須恵器片が散見されたほか，図示していないが，縄文時代晩期と見られる粗製鉢の体部片1点が出土している。



SD02層位 a-a'						備 考
No	土 色	土 質	しまり	保 水 性		
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	ハード	あり	ロームブロック混入 ロームブロック微量混入 地山ローム土層混入 ロームブロック少量混入 ロームブロック微量混入 ロームブロック多量混入 地山ローム土層混入 地山ローム土層混入	
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	ハード	あり		
3	10YR4/6 褐色	シルト	ハード	あり		
4	10YR5/6 黄褐色	シルト	ハード	あり		
5	10YR3/2 黒褐色	シルト	ハード	あり		
6	10YR2/2 黒褐色	シルト	ハード	あり		
7	10YR3/2 黒褐色	シルト	ハード	あり		
8	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	ややハード	あり		
9	10YR5/6 黄褐色	シルト	ややソフト	あり		
10	10YR3/3 暗褐色	シルト	ややソフト	あり		
11	10YR6/8 明黄褐色	シルト	ややハード	あり		
12	10YR2/2 黒褐色	シルト	ややソフト	あり		

SD03層位 b-b'						備 考
No	土 色	土 質	しまり	保 水 性		
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	ややハード	あり	腐植土	
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	ややハード	あり		
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	ややハード	あり		
4	10YR6/4 にぶい黄褐色	粘土	ややハード	あり		
5	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘土	ややハード	あり		

第23図 SD02・03溝状遺構

6. ま と め

唐川(3)遺跡は、十三湖北岸に位置し、四ツ滝山・木無岳から西側に派生した標高20～30mほどの台地上に立地している。遺跡が立地する台地は、北側に磯松川、南側に唐川といった河川に挟まれた立地環境にある。

調査の結果、平安時代の竪穴住居4軒、溝状遺構1基、焼成遺構2基のほか、縄文時代と思われる溝状遺構2基が検出された。縄文時代の溝状遺構は、いわゆるTピットと呼ばれるもので、狩猟用の落とし穴としての用途が考えられるものである。

以下、ここでは遺跡の主体時期となる平安時代の集落様相を検討しておきたい。竪穴住居跡は調査区南側の一角にまとまって4軒が検出されたにも係わらず、竪穴住居の重複はなく、住居の平面形態や規模、或いはカマドの形態・構造といった要素を見ると、住居形式に定型的な様式を見ることが出来る。このことから、遺跡の存続時期が比較的短期間であったこと、つまり一定の時間内の竪穴住居跡の併存関係（同時期性）を想定させるのである。

それでは、次ぎに竪穴住居跡の共伴遺物（廃絶時の一括遺物）の検討を通じて、上記した仮定が成立するのかどうか、検討しておきたい。そこで、今回検出された竪穴住居跡に伴う遺物を概観すると、次ぎのような共通する土器の製作技術上の特徴や器種組成が認められる。土師器の器種には、甕が圧倒的に多く、坏・鍋がわずかに認められる。甕は頸部の段がほとんど消滅し、口縁は緩く外側に摘み出す程度のものである。甕の製作・調整技法をみると、粘土紐巻上げ成形後に口縁部を横ナデ、体部外面を大胆にヘラケズリ調整している。また、径2～3mmの砂粒を多く含む粗雑な胎土を用いるなど、全体に粗雑な作りであり簡略化が顕著である。また、底部に網目状圧痕を伴う甕も存在する。坏は須恵器製作の影響を受けた底部無調整（回転糸切り痕）のもので、いわゆる赤焼き土器や須恵系土器と呼称されるものがわずかに認められる程度である。いわゆる内面ミガキ黒色処理の坏は全く認められなかった。鍋は粘土紐巻上げ成形後に口縁部を横ナデしながら、端部をまっすぐに引き伸ばしている。また、体部外面は大胆にヘラケズリ調整している。

一方、須恵器は土師器に比べて絶対量が非常に少ない点が挙げられる。すべて五所川原産の須恵器であり、貯蔵具の長頸甕・甕が卓越するが、坏類は全く認められない。

以上、共伴する土器製作技術の特徴や器種組成を概観すると、土師器では八木光則氏が「北奥型甕」〔八木2002〕と呼称した東北北部に特徴的な粘土紐巻上げ成形の粗雑な土師器甕が卓越する状況や、赤焼き土器や須恵系土器と呼ばれる底部無調整の坏類の激減、及び内面ミガキ黒色処理の坏類の欠落する状況が認められる。一方、須恵器では五所川原産のもので占められるが、坏類は全く認められず、貯蔵具の長頸甕・甕がわずかに存在するだけである。

以上の検討を通じて、遺跡の時期は平安時代後期の10世紀後半代とするのが妥当な年代観ではないかと思われる。今回の調査で明らかとなった唐川(3)遺跡の集落様相、或いは土器の特徴や器種組成を通じて、周辺遺跡との相互関係を今後明らかにしていくことが課題となろう。

【引用・参考文献】

- 八木光則 (2002) 「奥六郡安倍氏から奥州藤原氏へ」『平泉の世界』奥羽史研究叢書3
入間山寅夫・本澤慎輔 編
- 工藤清奈 (2000) 「浪岡町の古代遺跡」『浪岡町史』第1巻

第Ⅲ章 ニツ沼遺跡の調査

1. 遺跡の位置と周辺遺跡

十三湖北岸地域には、矢形石山(587m)・増川岳(714m)・四ツ滝山(670m)・木無岳(587m)・浜名岳(603m)など峰々が連なり、中山山地を形成している。ニツ沼遺跡は、その四ツ滝山から南側に派生した標高20~30mほどの台地上に立地しており、西側には唐川、東側には山王坊川といった河川に挟まれた立地環境にある。遺跡は通称「ニツ沼」と呼ばれる湖沼の北岸から東岸にかけて存在する中世遺跡である。また、周辺には大小の湖沼群が点在しており、「大沼」周辺には縄文晩期末葉(大洞A'式期)の遺物包含層も確認されている〔市浦村教委 2001〕。

また、ニツ沼遺跡の南東約400mの台地縁辺には縄文前期・中期の笹畑貝塚が知られている。

2. 調査方法と経過

ニツ沼遺跡は、昭和28・29年に早稲田大学 桜井清彦教授によって埋まりきらずに残された19箇所の竪穴状遺構の窪地のうち、9箇所が発掘調査されている。その中で、竪穴遺構から青磁碗片のほか、天璽元寶(北宋)や永樂通寶(明)といった銭貨や刀子片が出土しており、注目されている〔桜井 1955〕。

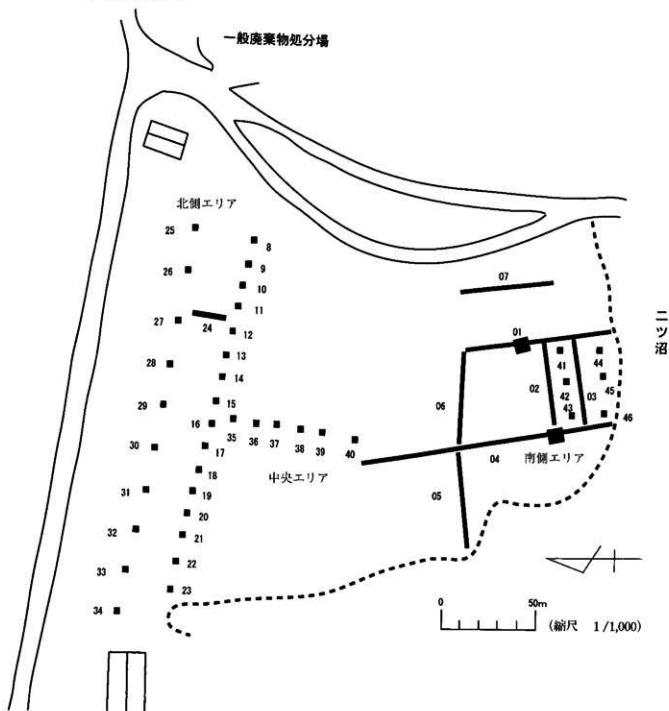
そこで、試掘調査は適宜、トレンチ調査及びテストピットを任意に設定し、遺構や遺物の検出に努めた。検出された遺構は完掘及び写真撮影を行った。遺物は出土位置を記録しながら取り上げている。なお、測量調査はトータルステーションを使用し、調査位置や周辺の道路・建物を簡易測量している。等高線は記録していない。調査位置名は順次、試掘坑を設けた順に1トレンチ、2トレンチと呼称していった。最終的には46箇所のトレンチ(試掘坑)を調査することができた。

3. 調査の成果

調査位置は調査区の南側と北側及び中央部の大きく3地点に分かれている(第24図)。調査区は起伏のある地形となっており、南側及び北側は地形的に標高の高い位置にある。一方、南側と北側に挟まれた中央部は低い地形となっており、遺構・遺物の存在する可能性が低いと思われた。

調査区南側は、沼地(ニツ沼)に面した台地上にあたる。トレンチ名ではNo1~No7、及びNo41~No46トレンチに相当する。一方、調査区北側は道路(村道)に面した場所にあたる。トレンチ名では、No8~No34トレンチに相当する。調査区中央では、起伏のある台地に挟まれた低地に当たっている。トレンチ名では、No35~No40トレンチに相当する。基本層序については、次のように大きく3層に分かれる。1層は10YR5/1褐灰色のシルト土で、牧草の腐植土を含んでいる。2層は10YR3/2黒褐色のシルト土である。3層は10YR6/6の明黄褐色のシルト土の地山ローム層である。以下、個別にトレンチの概要について述べる。

至 春日内観音堂



第24図 ニツ沼遺跡 調査位置図

a 調査区南側エリア

1 トレンチ

調査区の南側にある沼地（二ツ沼）に直交するように、南北方向に幅30cm×長さ40mのトレンチを設定した。トレンチの中央部が最も高く、南及び北側に向かうほど低い地形となっている。トレンチの深さは15～30cmで地山ローム層に達した。トレンチ南端から北へ約50mの地点で須恵器片3点が出土したので、遺構確認のため、さらに6m四方のトレンチ区を拡張した。結局、遺構は確認できず、須恵器が合計4点出土しただけであった。拡張区において、遺物が出土した上層は地山ローム粒がブロック状に混入しており、攪乱を受けていたことが明らかとなった。

2 トレンチ

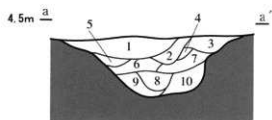
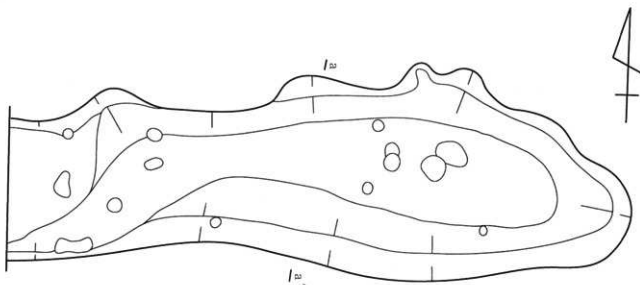
調査区の南側にある沼地に平行するように、東西方向に幅30cm×長さ22mのトレンチを設定した。1 トレンチと直交している。トレンチの深さは20cmで地山ローム層に達した。トレンチ東端から西へ約8mの地点で、SD01溝状遺構が検出されたので、確認のためトレンチを拡張して完掘した。SD01は幅70～100cmで、検出長3.3mであった（第25図）。底面からは径10cmほどの小ピットが多数検出され、風倒木痕の可能性が高いことが判明した。覆土中からは須恵器片1点が出土している。また、2 トレンチの表土の大部分は、地山ローム粒がブロック状に混入しており、牧場地化に際して大規模な掘削を受けていることが判明した。

3 トレンチ

2 トレンチと同じく、調査区の南側にある沼地に平行するように、東西方向に幅30cm×長さ23mのトレンチを設定した。1 トレンチと直交しており、2 トレンチよりも沼地に近い。トレンチの深さは20～40cmで地山ローム層に達した。中央部では、地表面から地山面までの深さが40cmであり、上層の堆積は深いのが、東端及び西端では20cmと浅くなっている。1層の表土層は攪乱を受けていない。また、2層も攪乱を受けず、安定した土層の堆積を見せる。しかし、遺構・遺物は検出できなかった。

4 トレンチ

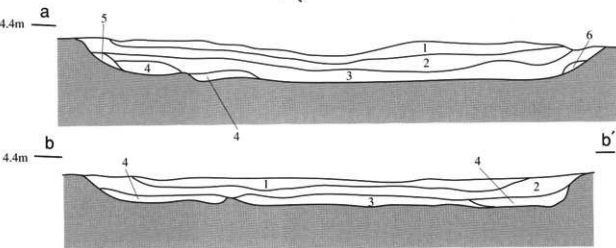
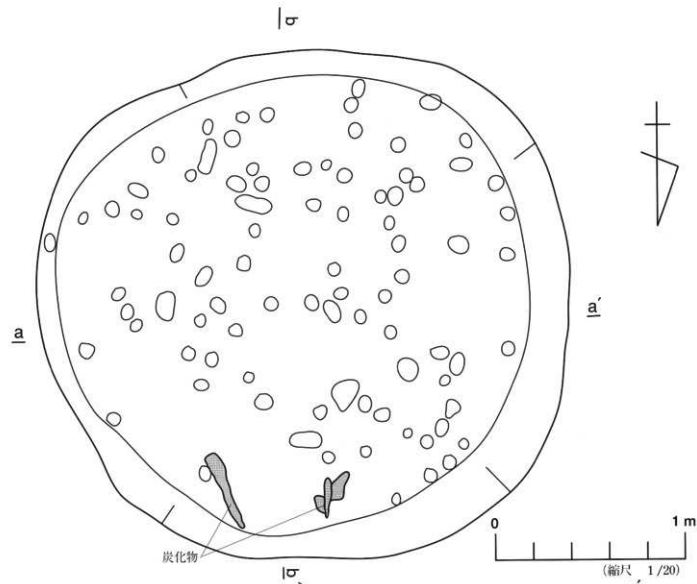
調査区の南側にある沼地（二ツ沼）に直交するように、南北方向に幅30cm×長さ68mのトレンチを設定した。トレンチの深さは15～30cmで地山ローム層に達した。地形的には沼地に近い南側が最も標高が高く、北側に向かうほど低くなっている。トレンチ南端から北へ約10mの最も標高が高い地点で、遺構が検出された。さらに、確認のためトレンチを拡張したところ、竪穴状遺構（SI01）であることが判明した。SI01は直径2.7～2.8mのほぼ円形となる。深さは15～20cmとやや浅い皿型を呈する。覆土からは、炭化物や焼土粒が多く検出されている。また、SI01の底面からは、炭化材のほか、径10cmほどの小ピットが多数確認された（第26図）。遺物はほとんど出土しておらず、メノウ石1点が出土しただけであった。そのため竪穴状遺構の性格や年代等は判明しなかった。



(縮尺 1/20)

SD01 溝状遺構 東壁層位 a-a'					
No.	土色	土質	保水性	備考	
1	10YR3/1 黒褐色	ややシルト	ややあり	C小・微量, 黄褐色シルト粒小~中・少量混入	
2	10YR3/1 黒褐色	ややシルト	ややあり		
3	10YR3/2 黒褐色	ややシルト	ややあり	C小・微量混入	
4	10YR4/3 濃い黄褐色	ややシルト	ややあり		
5	10YR4/2 灰黄褐色	ややシルト	ややあり	C小~大・微量混入	
6	10YR3/2 黒褐色	ややシルト	ややあり		
7	10YR2/3 黒褐色	ややシルト	ややあり	C小・微量混入	
8	10YR6/6 暗黄褐色	シルト	ややあり		
9	10YR3/4 暗褐色	ややシルト	ややあり	C小・微量, 明黄褐色シルト粒小~大・微量混入	
10	10YR3/4 暗褐色	ややシルト	ややあり		

第25図 2 トレンチSD01溝状遺構



SI01 竪穴状遺構 東西壁層位					
No	土 色	土 質	保 水 性	備 考	
1	10YR3/1 黒褐色	ややシルト	ややあり	炭灰土、C微量	
2	10YR2/2 黒褐色	ややシルト	ややあり	C小～中・少量、焼土粒微量混入	
3	10YR2/1 黒色	シルト	ややあり	C小～大・少量混入	
4	10YR2/3 黒褐色	ややシルト	ややあり	C小～大・少量、焼土粒小～大・少量混入	
5	10YR2/3 黒褐色	ややシルト	ややあり	C小～大・少量、焼土粒小・少量混入	
6	10YR4/4 黒色	ややシルト	ややあり		

第26図 4トレンチSI01竪穴状遺構

5 トレンチ

4 トレンチに直交するように、東西方向に幅30cm×長さ25mのトレンチを設定した。トレンチの深さは10～30cmで地山ローム層に達した。トレンチ西側では包含層が浅く、表土を除去すると、すぐに地山面が露出した。掘削の影響によるものであろう。また、トレンチ東側では、やや深く30cmの包含層が堆積する。遺構・遺物は無い。

6 トレンチ

1 及び 4 トレンチに直交するように、東西方向に幅30cm×長さ24mのトレンチを設定した。なお、6 トレンチは 4 トレンチを挟んで、5 トレンチと対になる位置関係となっている。トレンチの深さは20～30cmで地山ローム層に達した。トレンチ東端では、1層の表上に地山ローム粒が混じる攪乱土であった。その1層中から、縄文土器片2点が出土した。2層は10～20cmの安定した堆積土が見られる。

7 トレンチ

村道に近接したところで、南北方向に幅30cm×長さ25mのトレンチを設定した。トレンチの深さは20～40cmで地山ローム層に達した。1層の表土は10cmほどの堆積が見られる。トレンチ南端で地山ローム粒が混じるなど攪乱を受けていた。2層は20cmほどの安定した堆積土である。遺構・遺物は無い。

41 トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは20cmで地山ローム層に達した。1層の表土層しかなく、地山ローム粒を多量に含んだ攪乱土であった。直下は地山となる。大きく土地の改変や掘削の影響を受けている。遺構・遺物は無い。

42 トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは40cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、地山ローム粒を少量含み、攪乱を受けている。2層は25cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

43 トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

44 トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは20cmで地山ローム層に達した。1層の表上層しかないが、攪乱を受けている様子はなかった。直下は地山となる。遺構・遺物は無い。

45トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは20cmで地山ローム層に達した。1層の表土層しかないが、攪乱を受けている様子はなかった。直下は地山となる。遺構・遺物は無い。

46トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは20cmで地山ローム層に達した。1層の表土層しかないが、炭化物を含んでいた。直下は地山となる。遺構は全く検出されず、遺物も出土していない。なお、41・44～46トレンチは、堆積土も浅く、掘削の影響が認められる。

b 調査区北側エリア

8トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、地山ローム粒を多量に含んだ攪乱土であった。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

9トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは35cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、地山ローム粒を多量に含んだ攪乱土であった。2層は20cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

10トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、地山ローム粒を多量に含んだ攪乱土であった。2層は20cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

11トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは35cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は20cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

12トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

13トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

14トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは20cmで地山ローム層に達し、やや浅い。1層の表土は10cmほどで、攪乱は認められない。2層は10cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

15トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは25cmで地山ローム層に達した。1層の表土は10cmほどで、攪乱は認められない。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

16トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

17トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

18トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

19トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは35cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は20cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

20トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺

構・遺物は無い。

21トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは26cmで地山ローム層に達した。1層の表土は13cmほどで、攪乱は認められない。2層は13cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

22トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは25cmで地山ローム層に達した。1層の表土は13cmほどで、攪乱は認められない。2層は12cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

23トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは22cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、地山ローム粒を多量に含んだ攪乱土であった。2層の堆積土は浅い。遺構・遺物は無い。

24トレンチ

調査前に竪穴状遺構の窪みが確認できたので、南北方向に幅30cm×長さ9mのトレンチを設定した。トレンチの深さは30cmで地山ローム層に達した。調査の結果、地山ローム粒を多量に含んだ攪乱であることが判明した。攪乱上中からは須恵器片2点が出土している。

25トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは27cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、地山ローム粒を多量に含んだ攪乱土であった。2層は12cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

26トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は10cmほどで、地山ローム粒を多量に含んだ攪乱土であった。2層は20cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

27トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは40cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、地山ローム粒を多量に含んだ攪乱土であった。2層は25cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

28トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは47cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、地山ローム粒を多量に含んだ攪乱土であった。2層は32cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

29トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは33cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は18cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

30トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは35cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は20cmほどの堆積で安定している。遺構は全く検出されないが、1層中から須恵器壘片1点が出土している。

31トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは15cmで地山ローム層に達した。1層の表土層しかないが、攪乱は認められない。遺構・遺物は無い。

32トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

33トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは28cmで地山ローム層に達した。1層の表土は13cmほどで、攪乱は認められない。2層は15cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

34トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは22cmで地山ローム層に達した。1層の表土層しかないが、攪乱は認められない。遺構・遺物は無い。

c 調査区中央エリア

35トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは40cmで地山ローム層に達した。1層の表土は20cmほどで、攪乱は認められない。2層は20cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

36トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは45cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は30cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

37トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは50cmで地山ローム層に達した。1層の表土は20cmほどで、攪乱は認められない。2層は30cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

38トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは30cmで地山ローム層に達した。1層の表土は10cmほどで、攪乱は認められない。2層は20cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

39トレンチ

1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは35cmで地山ローム層に達した。1層の表土は15cmほどで、攪乱は認められない。2層は20cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

40トレンチ

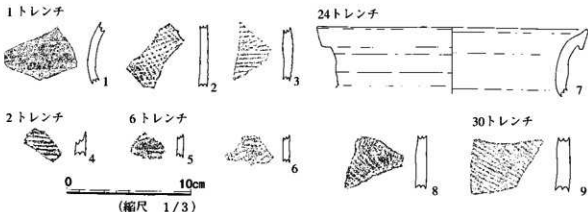
1m×1mのテストピットを設定した。テストピットの深さは40cmで地山ローム層に達した。1層の表土は10cmほどで、攪乱は認められない。2層は30cmほどの堆積で安定している。遺構・遺物は無い。

d 出土遺物について

ここでは試掘調査によって出土した遺物を改めて述べておきたい。

- 1 トレンチから須恵器の長頸壺片 1 点・甕片 3 点が出土している。
- 2 トレンチの溝状遺構から須恵器の甕片 1 点が出土している。
- 4 トレンチの竪穴状遺構からメノウ石片 1 点が出土している。
- 6 トレンチの包含層から、縄文土器の鉢片 2 点が出土している。
- 24 トレンチの攪乱土から、須恵器の長頸壺片 1 点・甕片 1 点が出土している。
- 30 トレンチから、須恵器の甕片 1 点が出土している。

今回の調査で出土した遺物は以上のとおりであるが、この中で須恵器としたものはすべて五所川原産であり、生産地の年代観から 9 世紀末から 10 世紀代の範疇に収まるものである。一方、縄文土器は粗製鉢の細片のため判然としないが、縄文晩期の鉢とする印象を受けた。なお、これまで二ツ沼遺跡は中世遺跡と理解されてきたが、今回の調査で中世陶磁器類は全く出土しなかった。



番号	種類	器類	トレンチ	備考	写真図版
1	須恵器	長頸壺	1 トレンチ	五所川原産、頸部にヘラ記号アリ	15図下
2	須恵器	甕	1 トレンチ	五所川原産、2点接合	15図下
3	須恵器	甕	1 トレンチ	五所川原産	15図下
4	須恵器	甕	2 トレンチ	五所川原産	15図下
5	縄文土器	鉢	6 トレンチ	粗製	15図下
6	縄文土器	鉢	6 トレンチ	粗製	15図下
7	須恵器	長頸壺	24 トレンチ	五所川原産、持子沢系	15図下
8	須恵器	甕	24 トレンチ	五所川原産	15図下
9	須恵器	甕	30 トレンチ	五所川原産	15図下

第27図 二ツ沼遺跡 出土遺物

4. ま と め

二ツ沼遺跡の試掘調査によって、次のようなことが明らかとなった。

昭和28・29年に早稲田大学の桜井清彦教授が発掘調査を実施しているが、かつて存在したとされる19箇所ほどの窪地（竪穴住居）は全く現況で確認することができなかった。また、一帯は牧場地化の影響によって、かなりの部分が削平を受けていることが明らかとなった。すでに周辺には一般廃棄物処分場や畜場などの施設が建設されており、遺跡の実態は不明となっている。

さて、試掘調査は大きく3つのエリアに分け、合計46箇所のトレンチ及びテストピットを設けた。調査の結果、須恵器や縄文土器がわずかに出土しただけであった。須恵器はすべて五所川原産のもので、年代的には9世紀末～10世紀代の平安時代後期に属するものである。一方、縄文土器は晩期の可能性が高い。これを裏付けるように、昭和28・29年に二ツ沼遺跡の発掘調査を実施した桜井の報告によれば、「二ツ沼の水底より亀ヶ岡式土器片や石器が採取される。」と指摘している〔桜井1955〕。

一方、これまで中世遺跡として周知されてきたが、今回の調査では中世の遺構や遺物は全く確認できなかった。また、4トレンチで検出されたSI01竪穴状遺構は遺物を伴うものでもなく、住居跡と判別できないような小ピットが無数底面から検出しただけで、遺構の性格は判明していない。さらに、2トレンチで検出されたSD01溝状遺構も風倒木痕の可能性が高いものであった。

【引用・参考文献】

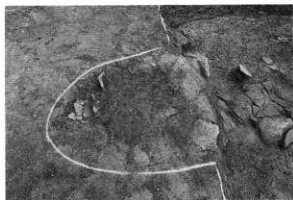
- 桜井清彦 1955 「青森県相内村二ツ沼遺跡について」『史観』早稲田大学史学会編 第45冊
市浦村教育委員会 2001 「岩井・大沼遺跡～県営大沼地区水環境整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告～」市浦村埋蔵文化財調査報告書 第12集



1. SI01完掘



2. SI01カマドの遺物出土状況



1. SI01カマド煙道部



2. SI01カマド出土遺物



3. SI01カマド断面



4. SI01内のK01土坑



5. SI01内のK02・03土坑



6. SI02完掘



7. SI02遺物出土状況



8. SI02土層断面



1. SI03完掘



2. SI03完掘接写



1. SI03カマド周囲の遺物出土状況



2. SI03内のK01・03土坑



3. SI03土層



4. SI03土層



5. SI03内のK05土坑



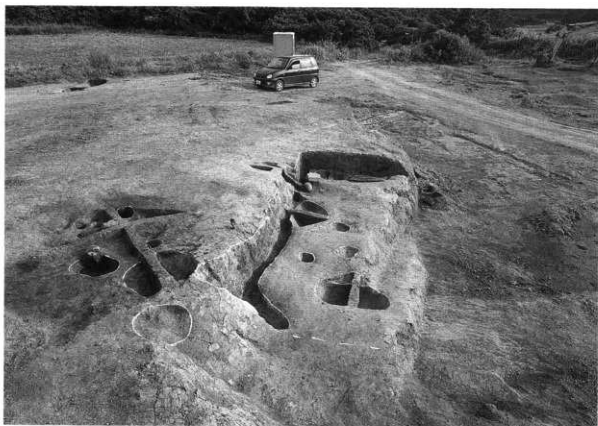
6. SI03内のK02土坑



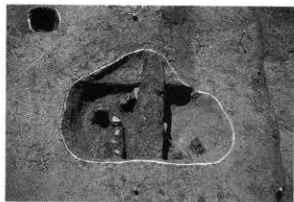
7. SI03内のK04土坑



8. SI03カマド周辺



1. SI04完掘



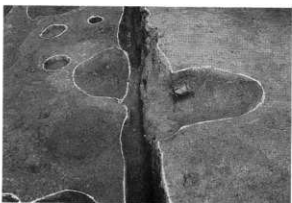
2. SI04内のK01土坑



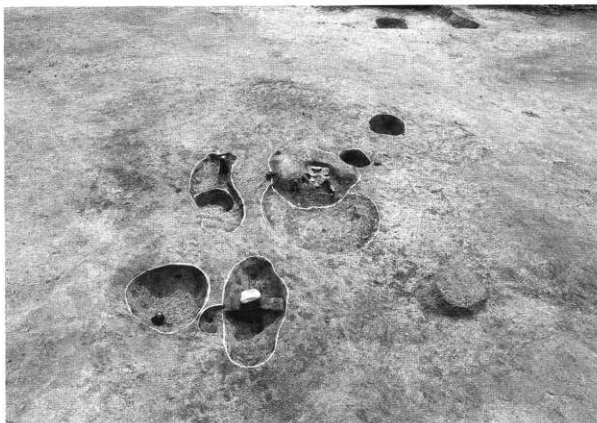
3. SI04内のK02・03土坑



4. SI04カマド



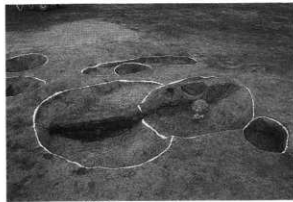
5. SI04カマド



1. SX01焼成遺構



2. SX01焼土出土遺物



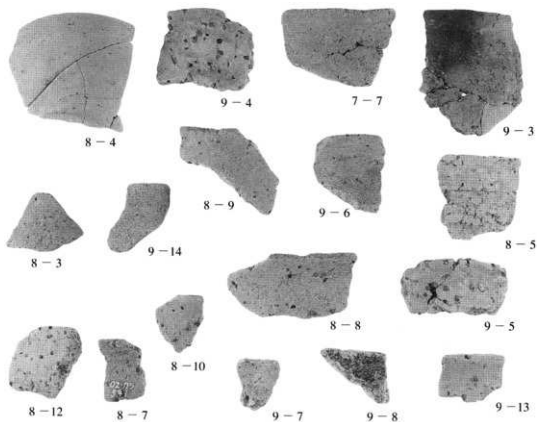
3. SX01土層断面



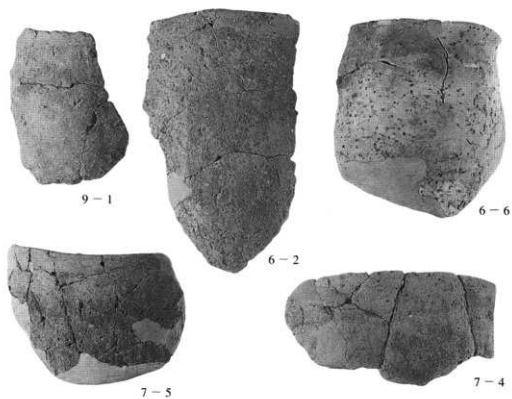
4. SX02焼成遺構



5. SD02溝状遺構

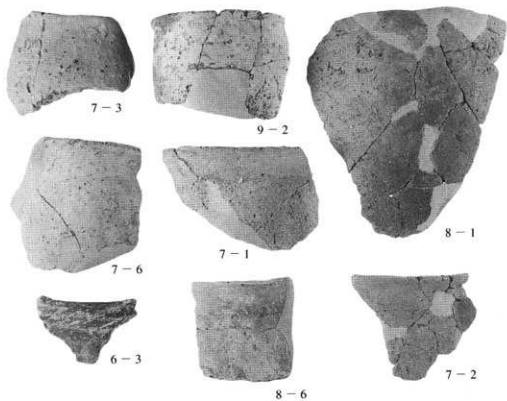


1. SI01出土遺物

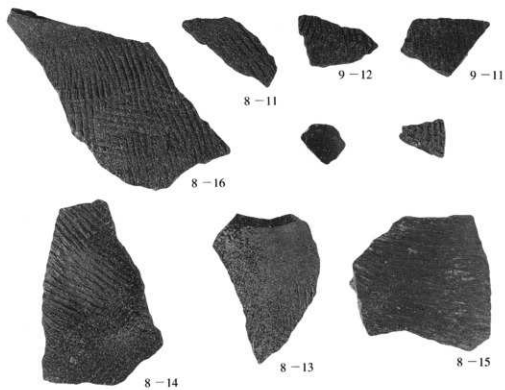


2. SI01出土遺物

※遺物番号は挿図番号に対応する。

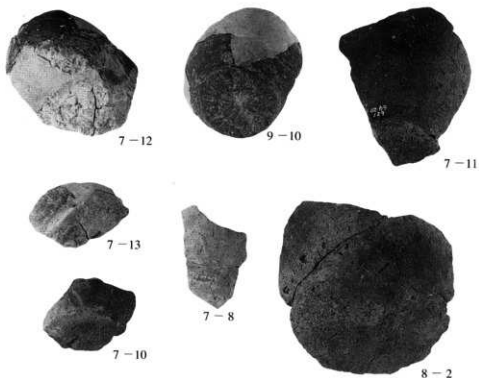


1. SI01出土遺物

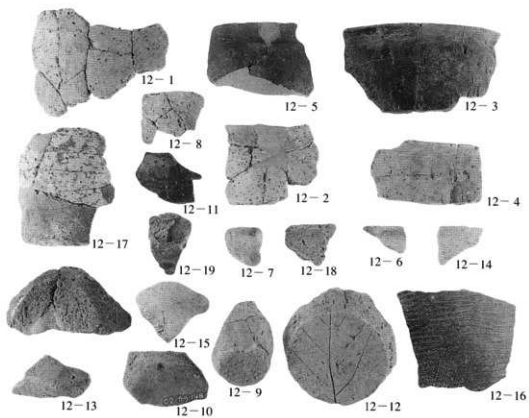


2. SI01出土遺物

※遺物番号は挿図番号に対応する。

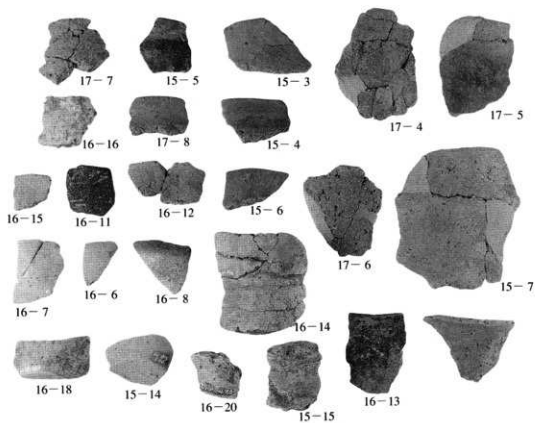


1. SI01出土遺物

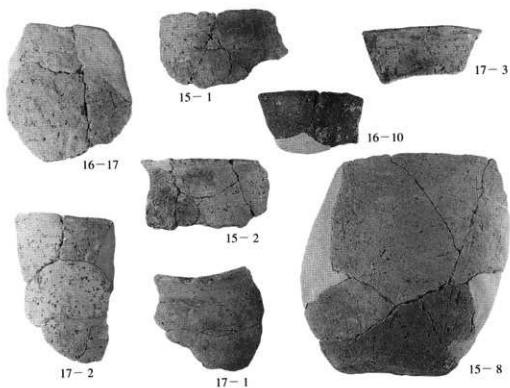


2. SI02出土遺物

※遺物番号は挿図番号に対応する。

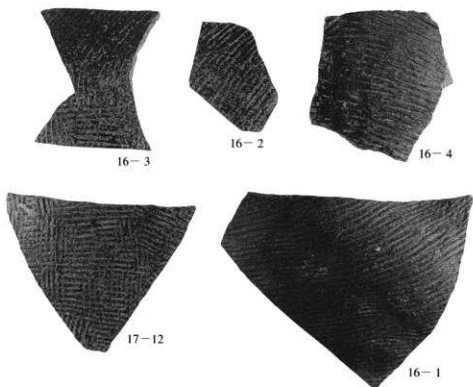


1. SI03出土遺物

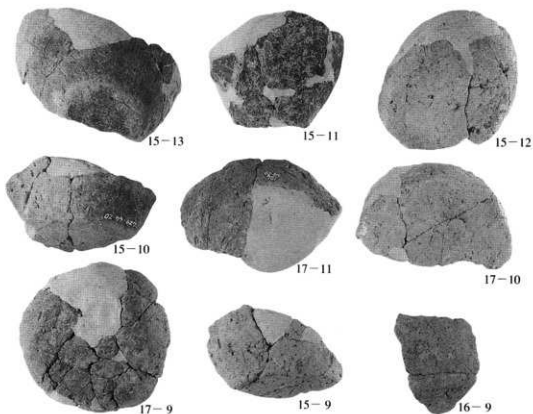


2. SI03出土遺物

※遺物番号は挿図番号に対応する。

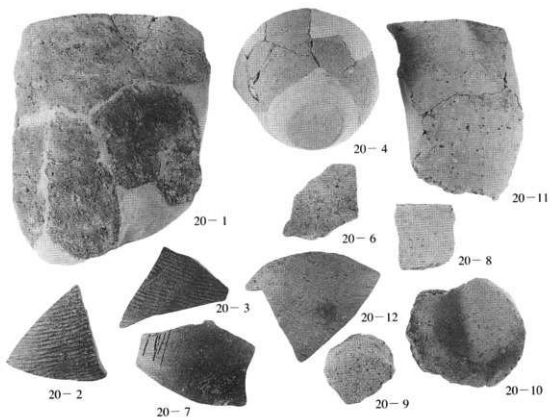


1. SI03出土遺物

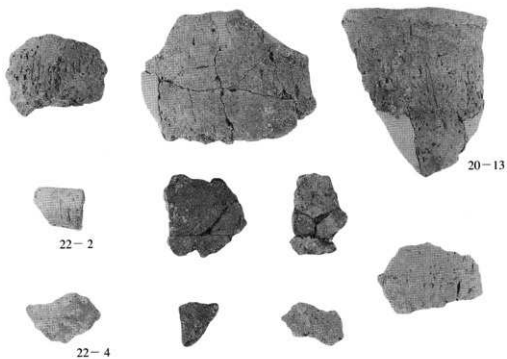


2. SI03出土遺物

※遺物番号は挿図番号に対応する。



1. SI04出土遺物



2. SX01、SX02出土遺物

※遺物番号は挿図番号に対応する。
なお、番号のないものは、SX02出土。



6-4



6-1



6-5



7-9



22-1



9-9



8-17



22-3



16-5



20-5

1. SI01・03・04、SX01出土遺物

※遺物番号は挿図番号に対応する。



1. 調査風景



3. 2トレンチ



2. 調査風景



4. 4トレンチ SI01検出



5. 4トレンチ SI01完掘



6. 2トレンチ SD01検出



7. 2トレンチ SD01完掘



1. 13トレンチ



2. 21トレンチ



3. 25トレンチ



4. 42トレンチ



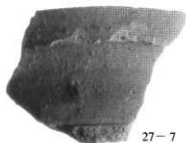
27-1



27-2



27-3



27-7



メノウ石



27-4



27-5



27-6



27-8



27-9

5. ニツ沼遺跡出土遺物

※遺物番号は挿図番号に対応する。

報 告 書 抄 録

ふりがな	しうらそんないせきはっくつちようさじぎょうほうこくしよいち
書名	市浦村内遺跡発掘調査報告書1
副書名	唐川(3)遺跡・ニツ沼遺跡
シリーズ名	市浦村埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	榊原道高, 長利素夫
編纂機関	青森県市浦村教育委員会
所在地	〒037-0401 青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81-384
発行年月日	西暦2004年2月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
からかわ 3(いせき) 唐川(3)遺跡	あはらいけんふたつづつせきこしうらそんないせきはっくつちようさじぎょうほうこくしよいち 青森県北津軽郡市浦村大字 いせきはつせき 磯松字磯野272-126・157	02385	38025	41度04 分30秒	140度20 分15秒	本調査: 20020805~ 20020829	7,200m ²	農事目的の造成に伴う発掘調査
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡番号					
ふたつぬまいせき ニツ沼遺跡	あはらいけんふたつづつせきこしうらそんないせきはっくつちようさじぎょうほうこくしよいち 青森県北津軽郡市浦村大字 あはらいせき 相内字岩井81-401	02385	38008	41度03 分30秒	140度21 分40秒	試掘調査: 20030602~ 20030606	110m ²	市浦村一般廃棄物最終処分場建設に伴う試掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
からかわ 3(いせき) 唐川(3)遺跡	散布地	平安時代・ 縄文時代	竪穴住居跡4軒・溝状遺構1基・焼成遺構2基(平安時代), 溝状遺構2基(縄文時代)	土師器・須恵器(五所川原産)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふたつぬまいせき ニツ沼遺跡	散布地	中世・ 平安時代・ 縄文時代	竪穴状遺構・溝状遺構(時期不明)	須恵器(五所川原産), メノウ石, 縄文土器片	

市浦村埋蔵文化財調査報告書 第16集

市浦村内遺跡発掘調査事業報告書 I
唐川(3)遺跡・ニツ沼遺跡

発行年月日 2004年 2月27日

編集・発行 青森県市浦村教育委員会
〒037-0401
青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81-384
TEL 0173-62-3751
十二湊遺跡発掘調査事務所
TEL 0173-62-3176

印刷 東北印刷工業株式会社
〒030-0902 青森市合浦一丁目2-12
TEL 017-742-2221・FAX 017-765-1115
